歴史学および日本文学研究者に対する実態調査からみる人文科学系研究者の情報行動

松林麻実子・岡野裕行

筑波大学
知的コミュニティ基盤研究センター
Research Center for Knowledge Communities
University of Tsukuba

知的コミュニティ基盤研究センター・モノグラフシリーズ 4
Research Center for Knowledge Communities Monograph Series, No. 4

ISSN 1348-3560

知的コミュニティ基盤研究センター・モノグラフシリーズ　4
Research Center for Knowledge Communities Monograph Series, No.4
ISSN 1348-3560

歴史学および日本文学研究者に対する実態調査からみる人文科学系研究者の情報行動

松林麻実子　・　岡野裕行

Information behavior pattern of researchers in humanities
based on user surveys for researchers in history and Japanese literature

筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター
Research Center for Knowledge Communities
University of Tsukuba

はじめに

人文科学領域を対象とした情報メディア利用実態調査はこれまで全く行われてこなかったわけではない．日本に限っても，断続的にではあるが調査が行われ，報告されてきた．例えば，国立大学図書館協議会では，2001 年と 2003 年に日本全国の国立大学の研究者を対象として電子メディアの利用実態調査を行っており[i]，その調査結果として人文社会科学系と自然科学系の教員・学生に分けて分析されたものが報告されている．また，そのあとを受ける形で 2007 年に行われた SCREAL 調査[ii]は，日本の大学に所属する研究者を対象とした，かなり詳細な情報メディア利用実態調査であるが，そこでもやはり人文社会科学系と自然科学系にわけて結果が報告されており，人文社会科学系研究者の利用動向が説明されている．しかし，それらの結果から人文社会科学系の研究者の情報メディア利用実態が明らかになったかというと，実はあまり明確なものが得られていないのが現状である．全体的な傾向を見たとき，自然科学領域の研究者と比較して，電子メディアの利用が低調であることだけは明らかであるが，ではなぜ低調なのか，人文社会科学領域の研究者はこれ以降も電子メディアを利用しないままなのか，ということはこれまでに行われてきた利用実態調査の結果からは推測し難い．このような状況にある要因は一つにまとめられるほど単純なものではないが，おそらく最大の要因は，人文社会科学系の諸領域が，多様な研究スタイルをもった研究者を内包していることにある．すなわち，自然科学系の諸領域と比較したときに，研究者の行動パターンを説明する要素とそれらの相互関係はより複雑なものになると思われる．したがって，人文社会科学系の研究者の情報メディア利用実態を明らかにし，電子メディアの普及可能性を考えるためには，多様性の存在をより把握しやすい手法－領域を限定し，時に極めて質的な調査－をとらなければならない．

そこで本書では，人文科学者の情報メディア利用と電子メディア利用実態を明らかにすることを目的として行った二つの異なる調査をそれぞれ報告する．一つは歴史学研究

---

[i] 国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース「大学における電子ジャーナルの利用の現状と将来に関する調査」

[ii] 学術情報の取得動向と電子ジャーナルの利用度に関する調査（電子ジャーナル等の利用動向調査 2007）報告書［URL: http://www.screal.org］

者を対象とし，自然科学領域における既存調査との比較も狙った形で行う質問紙調査の結果報告であり，松林麻実子が担当した．もう一つは日本文学研究者を対象とし，インタビュー調査を中心に，質的に明らかにする方法をとっており，岡野裕行が担当した．どちらの調査報告も，人文科学系研究者の情報行動実態の一端を紹介するにとどまっており，今後さらなる展開を必要とするものではあるが，本書の存在が人文科学研究者の情報行動の実態解明の一助になれば幸いである．

末筆ながら，岡野のインタビュー調査にご協力いただき，多くの示唆を与えてくださった日本文学研究者の方々，松林の質問紙調査にご回答いただくだけにとどまらず，調査に関して貴重な御意見をお寄せくださった歴史学研究者の方々に，この場をお借りして，感謝の意を表したい．

著者一同

目　次

はじめに

目次

Ⅰ.「歴史学分野の情報源および電子メディア利用に関する調査」からみる
歴史学研究者の情報行動……1

1.　はじめに……1
2.　回答者の分布……1
3.　研究活動における情報入手……2
3.1　研究活動において重要な情報メディア……2
3.2　研究活動に用いる資料とその利用……4
3.3　学術書・学術雑誌の利用……6
3.3.1　学術雑誌（電子ジャーナル）の読み……6
3.3.2　学術書・学術雑誌論文の探索……7
3.4　電子ジャーナルの利用……9
3.4.1　電子ジャーナルの利用度……9
3.4.2　電子ジャーナルに対する評価……9
4.　研究活動における成果公表……11
4.1　成果公表手段……11
4.2　研究者自らによる情報発信……11
5.　図書館の利用と認識……12
5.1　図書館への来館頻度……12
5.2　機関リポジトリの利用と認識……13
6.　調査結果から見る歴史学研究者の情報行動……13

付録：「歴史学分野の情報源および電子メディア利用に関する調査」調査票……17

Ⅱ. 日本近代文学研究者の研究活動における情報行動……21

1. はじめに……21
2. 文学研究者の情報収集行動……21
2.1 一次資料……21
2.1.1 冊子体の学術雑誌……22
2.1.2 学術論文のデジタル化……23
2.1.3 画像データベース……25
2.2 二次資料……26
2.2.1 個人書誌などのレファレンスツール……26
2.2.2 文献データベース……26
2.3 文学館……28
2.3.1 資料調査……28
2.3.2 資料展示……29
2.3.3 出版物……31
2.3.4 検索システム……32
2.4 インフォーマル・コミュニケーション……33
2.5 出版社……34
3. 文学研究者の情報公開行動……34
3.1 論文発表……34
3.2 学会発表……35
3.3 個人サイト……36
4. まとめ……37
4.1 本稿の結論……37
4.2 今後の展望……38
5. おわりに……39

Ⅰ．「歴史学分野の情報源および電子メディア利用に関する調査」からみる歴史学研究者の情報行動

松林麻実子

1. はじめに

人文科学領域の研究者の情報行動を明らかにすることの重要性については，「はじめに」ですでに述べたとおりであるが，本章ではその試みの一端として実施した「歴史学分野の情報源および電子メディア利用に関する調査」の結果を報告する．この調査は，日本の大学に所属する歴史学研究者を対象として，2008 年 3 月から 4 月にかけて行われた質問紙調査である．より具体的には「研究開発支援総合ディレクトリ（ReaD）」に研究分野を「日本史」「西洋史」「東洋史」「考古学」のいずれかで登録しており，大学に所属している研究者 1357 名を対象として，研究活動の際に利用する情報メディアと電子メディアの利用に関する設問 21 項目からなる質問票を用いて行われた．質問票は本章の末尾に付録として添付する．なお本調査は，これまで行われた自然科学領域における利用実態調査の結果との比較も視野に入れ，電子ジャーナルの利用に関する設問についてほぼ同様の質問項目を設定した．

本章では，調査結果について，回答者の分布，研究活動において重要と考える情報メディアとその利用，学術雑誌（電子ジャーナル）の利用と認識，成果公表のあり方，図書館の利用の順に報告し，最後にこれらの結果から推察できる範囲での歴史学研究者の情報行動と電子メディアの普及可能性について述べる．

2. 回答者の分布

2008 年 3 月に質問紙を発送して，4 月中旬に回答期限を設定した．分析には，2008 年 5 月末までに回収できたものを用いている．質問票有効回収数は 539 票，有効回収率は 39.7%である．

回答者の年齢と職位の分布を，それぞれ表 1.1，表 1.2 に示す．30 歳代以下のいわゆる若手研究者の割合が多少低い（80 名，14.9%）ことを除けば，回答者の年齢の分布はほぼ均等である（表 1.1）．それに対して，職位のほうは教授が 61.2%と圧倒的に多く，偏る結果となった（表 1.2）．職位の「その他」には，調査票が送付された当時は教授であったが，4 月以降退職して「名誉教授」になった，というような回答を分類した．大学に所属して研究活動を行っていたときの状況に即して回答されているものがほとんどであったため，調査結

果の分析に際しては有効回答に含めることとした.

表 1.1　回答者の年齢

60 歳以上	50～59 歳	40～49 歳	30～39 歳	29 歳以下	無回答	総計
129	184	145	77	3	1	539
23.9%	34.1%	26.9%	14.3%	0.6%	0.2%	100%

表 1.2　回答者の職位

教授	准教授	講師	助教	その他	無回答	総計
330	126	28	30	24	1	539
61.2%	23.4%	5.2%	5.6%	4.5%	0.2%	100.0%

次に，回答者の専門領域の分布を表 1.3 に示す．質問紙では，「日本史」「西洋史」「東洋史」の 3 領域と「古代」「中世」「近代」「現代」の 4 時代区分とを掛け合わせた 12 項目の選択肢に「考古学」を加えて 13 項目としてたずねたが，回収した調査票を精査した結果，特に日本史において時代区分が適切でなかったことがわかったため，ここでは領域のみに収斂させた形で結果を示すこととする.「日本史」(34.5%)，「西洋史」(28.0%) が比較的多いのに対して，「東洋史」(20.8%)，「考古学」(11.5%) が少ないという結果となった.

表 1.3　回答者の専門領域

日本史	西洋史	東洋史	考古学	無回答	総計
186	151	112	62	44	539
34.5%	28.0%	20.8%	11.5%	5.2%	100.0%

上記のとおり，本調査では回答者の基本的な属性として「年齢」「職位」「専門領域」をたずねたが，調査結果を分析した結果，「年齢」「職位」の 2 つの要素と各設問との間に有意な関係は見られなかった.「専門領域」に関しては，残念ながら統計的に有意とまでは言えないものの，領域間で多少の異なり傾向が認められたため，これ以降の報告は全て，専門領域ごと行っていくものとする.

3. 研究活動における情報入手

3.1 研究活動において重要な情報メディア

研究活動において利用する情報メディアについてたずねた結果を表 1.4 に示す（複数回

答)．研究活動において利用する情報メディアとしては，「日本史」「西洋史」「東洋史」の 3 つの領域では「文献資料（史料)」とする回答が最も多く，ほぼ 100%に近い結果となった．ついで利用が多いのは，やはり 3 つの領域に共通していた「学術雑誌論文」，ついで「学術書」であった．いずれの領域においても，「文献資料」には及ばないものの，「学術雑誌論文」は 9 割を超える回答，「学術書」も 8～9 割程度の回答が得られた．第 4 位に入るメディアもまた，3 つの領域に共通して「図像資料」であり，いずれの領域においても半数を超える結果が得られているが，先に言及した「文献資料」「学術雑誌論文」「学術書」が 9 割を超える回答を得ていたのと比較すると，少し差が開く印象がある．すなわち，「日本史」「西洋史」「東洋史」の 3 つの領域においては，圧倒的多数の研究者が文字情報メディアを中心的に利用しており，文字情報メディアほどではないものの，写真などの図像資料も日常的に利用しているということがわかる．

これらの 3 つの領域に対して異なる傾向が見られたのは「考古学」の領域である．ここでは，「考古資料」と「学術雑誌論文」の利用が最も多く，いずれも 98.4%という結果が得られた．「学術書」が 87.1%，「文献資料」が 79.0%で，それに続いている．他の 3 つの領域において第4位に入っていた「図像資料」についても 67.7%とそれなりの利用が認められる．すなわち，「考古学」領域の研究者は文字情報メディアももちろん日常的に利用しているが，他の 3 領域と比較したとき，その他のメディア（モノ，写真など）を利用する傾向がより強く，多様性があると言える．

表 1.4 研究活動において利用する資料（複数回答）

	日本史(N=186)	西洋史(N=151)	東洋史(N=112)	考古学(N=62)
文献資料（史料）	98.9%	98.7%	99.1%	79.0%
図像資料	65.6%	59.6%	71.4%	67.7%
映像・音声資料	23.7%	23.2%	25.0%	24.2%
民俗資料	15.6%	7.3%	25.0%	53.2%
考古資料	34.9%	19.2%	33.9%	98.4%
学術雑誌論文	93.0%	94.7%	94.6%	98.4%
学術書	86.0%	92.7%	92.0%	87.1%

表 1.4 に示した（すなわち質問紙において選択肢として示した）情報メディアについて，最も重要なものを回答してもらったところ，表 1.5 のような結果となった．「日本史」「西洋史」「東洋史」の 3 つの領域においては「文献資料」が 7 割から 8 割強，「考古学」の領域においては「考古資料」が 79.0%で，最も多い．日常的に利用する情報メディアとして回答が多かった「学術雑誌論文」および「学術書」はここでは極めて低い数値にとどまっている．

表 1.5 研究活動において利用する資料のうち最も重要なもの

	日本史	西洋史	東洋史	考古学
文献資料	79.0%	76.2%	87.5%	6.5%
図像資料	1.6%	0.7%	0.0%	0.0%
映像・音声資料	0.0%	0.0%	0.0%	1.6%
民俗資料	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
考古資料	0.0%	0.7%	2.7%	79.0%
学術雑誌論文	2.7%	4.0%	1.8%	4.8%
学術書	0.0%	9.9%	0.9%	0.0%
その他	7.5%	2.0%	2.7%	1.6%
無回答	8.1%	6.6%	4.5%	6.5%
総計	100%(186)	100%(151)	100%(112)	100%(62)

3.2 研究活動に用いる資料とその利用

前節において，研究活動に利用する資料として最も重視されているのは「文献資料」ないしは「考古資料」であることが明らかになった．それでは歴史学研究者は，学術書および学術雑誌論文を除いたそれらの研究活動に利用する資料について，どのような状態のものを利用し，いかにして入手しているのであろうか．本調査では研究活動に利用する資料（図書・雑誌論文を除く）の形態，入手手段，探索手段をたずねている．結果をそれぞれ表 1.6，表 1.7，表 1.8 に示す．

はじめに研究活動に利用する資料の形態についてたずねたところ，特に考古学領域においては「(資料の）現物」を用いるとする回答が 7 割を超え，圧倒的に多かった（表 1.6)．それ以外の 3 つの領域については，「(資料の）現物」という回答が多いものの 4 割程度にとどまっており，「ゼロックス・コピー」という回答が 3 割程度でそれに続く結果となった．すなわち，現物が手に入ればもちろんそれに越したことはないが，その代替物としての複写物も同じように研究活動に利用しているということである．それに対して先に述べた考古学については，現物を利用することに大きな意義があり，写真や画像などの代替物を利用するということはあまりないようである．

表 1.6　研究活動に利用する資料の形態

	日本史	西洋史	東洋史	考古学
（資料の）現物	45.7%	37.1%	41.1%	72.6%
ゼロックス・コピー	28.0%	36.4%	33.9%	11.3%
電子形態（CD-R／DVD-Rなど）	4.8%	3.3%	10.7%	4.8%
その他	14.0%	9.3%	9.8%	1.6%
雑誌論文・図書以外は使わない	2.7%	6.0%	0.9%	1.6%
無回答	4.8%	7.9%	3.6%	8.1%
総計	100% (N=186)	100% (N=151)	100% (N=112)	100% (N=62)

次に，研究活動に利用する資料の入手手段についてたずねたところ，「他機関に出向いて閲覧・複写」させてもらうという回答が 4 つの領域ともで最も多く 3〜4 割程度，「個人で購入」という回答がそれに続いて 2〜3 割程度となった（表 1.7）．それに対して，「所属機関の図書館で印刷媒体を閲覧もしくは複写」すると回答した者は 2 割に満たなかった．すなわち，研究活動のための資料を入手しようとする際には，研究者は所属機関の図書館に行くというよりむしろ，個人で購入したり，他機関に出向いたりすることで，自力で入手する傾向にあることがわかる．また，「インターネットで探す」や「電子的な形態で」という回答は極めて低い数値にとどまっている（いずれも 5%にも満たない）が，これはインターネット上に有用な情報源が存在していないためであるという理由が推察される．

表 1.7 研究活動に利用する資料の入手手段

	日本史	西洋史	東洋史	考古学
個人で購入	23.7%	31.1%	31.3%	22.6%
自分でネットで探して無料で入手	1.1%	0.7%	0.0%	3.2%
他機関に出向いて閲覧・複写	49.5%	39.7%	40.2%	32.3%
他の研究者からもらう・借りる	0.5%	0.0%	1.8%	1.6%
所属機関の図書館で印刷媒体を閲覧	5.4%	3.3%	4.5%	4.8%
所属機関の図書館で印刷媒体を複写	9.7%	11.9%	11.6%	8.1%
所属機関の図書館から電子形態で（電子ジャーナルなど）	1.6%	1.3%	2.7%	3.2%
雑誌論文・図書以外は使わない	1.1%	2.0%	2.7%	1.6%
その他	5.9%	5.3%	2.7%	12.9%
無回答	1.6%	4.6%	2.7%	9.7%
総計	100% (N=186)	100% (N=151)	100% (N=112)	100% (N=62)

最後に，研究活動に利用する資料の探索手段についてたずねた結果を表 1.8 に示す．いずれの領域においても「学術雑誌論文や学術書の脚注」が最も多く 9 割前後という結果となった．ついで，多少差は開くものの「大学や博物館が作成したデータベース」や「同じ分野の研究者との議論」「専門機関から提供される情報」などが半数強で続いている．領域全体に共通する支配的なデータベースがあるわけでも，統一的な探索手段があるわけでもなく，個人が学術雑誌や学術書，専門機関等が作成・提供するデータベースや情報など多様な情報源をそれぞれチェックすることによって，研究活動に利用する資料を入手していることがわかる．

表 1.8　研究活動に利用する資料の探索手段

	日本史 (N=186)	西洋史 (N=151)	東洋史 (N=112)	考古学 (N=62)
学術雑誌論文や学術書の脚注	92.5%	95.4%	92.0%	87.1%
大学や博物館が作成したデータベース	65.1%	45.7%	60.7%	56.5%
個人が作成したデータベース・リンク集	31.2%	21.2%	31.3%	30.6%
同じ分野の研究者との議論	55.9%	51.7%	60.7%	64.5%
資料を扱っている書店などのウェブサイト	20.4%	29.1%	32.1%	14.5%
Google等のサーチエンジン	37.1%	43.0%	33.0%	35.5%
専門機関から提供される情報	67.7%	60.9%	56.3%	54.8%

3.3 学術書・学術雑誌の利用

3.1 において，研究者が研究活動において最も重要だと考えているのは「史料」であることが明らかになったが，日常的に利用が多いという点では「学術書・学術雑誌」という回答も「史料」に匹敵する数を得ている．そこで，本節では「学術書・学術雑誌」の利用について，「学術雑誌の読み」「学術書・学術雑誌論文の探索」の順に回答を整理することとする．

3.3.1 学術雑誌（電子ジャーナル）の読み

学術雑誌（電子ジャーナルも含む）を読む際に，どのような形態をとっているか，最もあてはまるもの一つを回答してもらった結果を表 1.9 に示す.「日本史」,「西洋史」「東洋史」の 2 つの領域，そして「考古学」では，それぞれ若干ではあるが異なる傾向がみられる．まず「日本史」においては，「図書館で必要ページのみ複写」が最も多く 45.2%,「定期購読誌をブラウジング」が 27.4%でそれに続いている．「図書館で現物を閲覧」は 14.5%で第 3 位である．それに対して「西洋史」「東洋史」の 2 つの領域では，「図書館で必要ページのみ複写」が最も多いという傾向は「日本史」と同様であるものの，数値はどちらも 4 割弱

で「日本史」より減少している．そしてそれに続くのは「図書館で現物を閲覧」の 25%である．「定期購読誌をブラウジング」は 1 割強で第 3 位である．最後の「考古学」は，さらに傾向が異なり，最も多いのが「図書館で現物を閲覧」で 25.8%，「図書館で必要ページのみ複写」がそれに続いている．第 3 位に来るのは「電子ジャーナルの閲覧」で 21.6%である．他の 3 領域では上位にあった「定期購読誌をブラウジング」は 16.1%で第 4 位となっている．

「考古学」に見られた電子ジャーナル閲覧が上位に来るという傾向をどう解釈するかについては 3.4 においてあらためて触れることとするが，それ以外の結果から読み取れるのは，歴史学研究者は，自然科学領域の研究者と比較したときに図書館への依存度がそれほど高くないということである．今回の調査結果においても，図書館において現物を閲覧したり，必要ページを複写したりするという回答が上位に来ていることから，歴史学研究者の学術雑誌の利用という情報行動において図書館のリソースが一定以上の役割を果たしていることは確かである．ただし，「定期購読誌をブラウジングする」という回答との数値の開きは自然科学研究者を対象とした調査結果のそれと比較してかなり小さく，学術雑誌の利用という情報行動一つをとっても，かなり多様なパターンが存在しており，一つのパターンに統合して理解するのは難しいことがうかがわれる．

表 1.9　学術雑誌（電子ジャーナル含む）の利用形態

	日本史	西洋史	東洋史	考古学
定期購読誌をブラウジング	27.4%	13.2%	13.4%	16.1%
図書館で現物を閲覧	14.5%	25.8%	25.0%	25.8%
図書館で必要ページのみ複写	45.2%	38.4%	38.4%	22.6%
自分のPCで電子ジャーナル閲覧	5.9%	9.3%	8.0%	21.0%
学術雑誌（電子ジャーナル）は利用しない	1.6%	4.6%	1.8%	4.8%
その他	0.5%	0.7%	3.6%	3.2%
無回答	4.8%	7.9%	9.8%	6.5%
総計	100% (N=186)	100% (N=151)	100% (N=112)	100% (N=62)

3.3.2 学術書・学術雑誌論文の探索

学術書および学術雑誌論文を探す頻度およびその手段についてたずねた結果を表 1.10，表 1.11 に示す．探索の頻度については，いずれの領域においても「週に 1 回以上」という回答が最も多く 4～6 割程度であった（表 1.10）．それに続くのは，「日本史」「西洋史」「東洋史」では「月 1 回以上」が 2 割前後，「考古学」では「ほぼ毎日」で 3 割弱という結果になった．すなわち，「考古学」に関しては比較的頻繁に，その他の 3 領域についてもある程度の頻度で情報検索が行われている．

それでは歴史学研究者が文献探索と言うとき，彼らの具体的な行動はどのようなもので

あろうか．具体的にどのような探索行動を行っているかについてあてはまる選択肢全てを回答してもらう形式で調査した（表 1.11）．いずれの領域においても最も多かった回答は「学術雑誌の巻末目録」で 8 割前後，ついで「大学図書館 OPAC」が 7 割前後という結果になった．ただし，歴史学研究者の多くが文献探索手段として「学術雑誌の巻末目録」を利用しているということはいえるが，それが支配的な情報探索手段というわけではない．歴史学研究者は，実に様々な手段を用いて研究に必要な学術書・学術雑誌論文を探索している．今回は学術書と学術雑誌論文を一つにまとめて聞いてしまったために多様性が強調される結果となったが，両者を分けて聞くことで，より簡潔でわかりやすい行動パターンが見えてくるものと思われる．

表 1.10　学術書・学術雑誌論文を探す頻度（N=538*）

	日本史	西洋史	東洋史	考古学
ほぼ毎日	16.1%	14.0%	16.1%	29.0%
週に1回以上	61.8%	49.3%	53.6%	43.5%
月に1回以上	17.7%	28.0%	27.7%	21.0%
数か月に1回程度	3.2%	6.7%	1.8%	4.8%
年に1回程度	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%
無回答	1.1%	0.7%	0.9%	1.6%
	100.0%(N=186)	100.0%(N=150)	100.0%(N=112)	100.0%(N=62)

*学術書・論文を利用しない 1 名を除く

表 1.11　学術書・学術雑誌論文を探す手段（複数回答）

	日本史 (N=186)	西洋史 (N=150)*	東洋史 (N=112)	考古学 (N=62)
学術雑誌の巻末目録	84.4%	80.7%	81.3%	72.6%
書店の目録	43.0%	64.0%	65.2%	22.6%
専門領域に特化した目録（冊子体）	52.2%	41.3%	63.4%	41.9%
専門領域に特化した目録（オンライン）	38.7%	40.0%	52.7%	32.3%
大学図書館OPAC	76.9%	73.3%	75.9%	62.9%
国立国会図書館OPAC	62.4%	54.7%	62.5%	33.9%
個人が作成した文献リスト	32.8%	24.0%	38.4%	32.3%
図書館や書店に出向いてブラウジング	29.0%	22.0%	25.0%	24.2%

Google等のサーチエンジン	38.2%	44.0%	38.4%	43.5%
その他	2.2%	6.0%	3.6%	1.6%

*「学術書や学術雑誌論文を利用しない」と回答した 1 名を除く

3.4　電子ジャーナルの利用

「はじめに」において述べたように，本調査の目的の一つにはこれまで自然科学領域において行われてきた利用実態調査との比較が含まれている．そのため，調査項目には電子ジャーナルに関する設問を設定した．ここでは「利用度」「評価」の順に回答を整理する．

3.4.1 電子ジャーナルの利用度

電子ジャーナルの利用度についてたずねた結果を表 1.12 に示す.「考古学」を除く 3 つの領域においては「よく利用する」「ときどき利用する」を合わせると 3〜4 割程度になり,「過去に利用経験あり」「利用したことがない」を合わせた数値（5〜6 割）より若干少ない．それに対して「考古学」では「よく利用する」「ときどき利用する」を合わせた 40.3%のほうが「利用したことがある」「利用したことがない」を合わせた 25.8%よりかなり多い．したがって,「考古学」においては電子ジャーナルが一定程度利用されており，存在が認知されているとみなすことができる．3.3.1 において,「考古学」のみ，学術雑誌の読み方として「自分の PC で電子ジャーナルで」という回答が一定程度あることに触れたが，その結果も「考古学」領域において電子ジャーナルの利用が一定程度あることを裏付けるものとみなすことができる．その一方で「日本史」「西洋史」においては「(電子ジャーナルが）どのようなものかわからない」という回答も数%ではあるものの存在しており，領域によって認知度に差があることがわかる．

表 1.12　電子ジャーナルの利用度

	日本史 (N=186)	西洋史 (N=151)	東洋史 (N=112)	考古学 (N=62)
よく利用する	3.2%	9.3%	7.1%	14.5%
ときどき利用する	25.8%	31.8%	32.1%	25.8%
過去に利用経験あり	19.4%	23.8%	21.4%	24.2%
利用したことがない	44.6%	30.5%	35.7%	1.6%
どのようなものかわからない	5.9%	4.0%	0.9%	1.6%
無回答	1.1%	0.7%	2.7%	0.0%

3.4.2　電子ジャーナルに対する評価

電子ジャーナルの利用度に関する設問において「よく利用する」「ときどき利用する」と

回答した研究者に対して，電子ジャーナルの性質のうち重要だと思うものをたずねたところ，表 1.13 のような結果になった．いずれの領域においても「24 時間いつでも入手できる」が最も多く 5〜6 割程度，ついで「自宅など好きな場所から入手できる」が 4 割強から 6 割で続いている．一般的に「時空間からの解放」は電子ジャーナルのメリットとみなされているが，歴史学分野においても利用者の認識としては同様の傾向があることが言える．ただし，その他の選択肢も一定程度の回答数を得ていることから，電子ジャーナルのメリットに対する認識は分散傾向にあると言える．

表 1.13　電子ジャーナルの重要な性質（複数回答）

	日本史 (N=54)	西洋史 (N=62)	東洋史 (N=44)	考古学 (N=25)
印刷物と同じ内容が入手できる	35.9%	50.0%	47.7%	24.0%
印刷物では入手できない情報が得られる	15.6%	25.8%	20.5%	20.0%
24時間いつでも入手できる	54.7%	61.3%	56.8%	52.0%
自宅など好きな場所から入手できる	46.9%	66.1%	61.4%	64.0%
印刷物より早く入手できる	23.4%	41.9%	45.5%	28.0%
論文や内容が電子的に検索できる	43.8%	43.5%	54.5%	40.0%
その他	1.6%	0.0%	0.0%	20.0%

電子ジャーナルの利用度に関する設問において「過去に利用したことがある」もしくは「利用したことがない」と回答した研究者に対して電子ジャーナルを利用しない理由をたずねたところ，表 1.14 のような結果となった．いずれの領域においても「紙のほうが読みやすい」が最も多く 6 割強，ついで「読みたい雑誌が電子ジャーナルになっていない」が半数強という結果になった．「日本史」と「東洋史」に関しては，「現状のやり方に満足しており，変える必要性を感じない」という回答も多かった．

表 1.14　電子ジャーナルを利用しない理由（複数回答）

	日本史 (N=119)	西洋史 (N=82)	東洋史 (N=64)	考古学 (N=36)
多数の論文をブラウジングしたい	6.7%	6.1%	4.7%	5.6%
紙のほうが読みやすい	67.2%	62.2%	60.9%	69.4%
電子版へのアクセスに時間がかかる	4.2%	3.7%	10.9%	13.9%
印刷版雑誌が手近にある	39.5%	26.8%	32.8%	30.6%
よく読む雑誌が電子ジャーナルになっていない	56.3%	53.7%	62.5%	50.0%
図書館が読みたい電子ジャーナルを契約していない	10.9%	17.1%	29.7%	8.3%

現在のやり方に満足しており，変える必要性を感じない	53.8%	24.4%	70.3%	19.4%
その他	3.4%	4.9%	1.6%	5.6%

4. 研究活動における成果公表

4.1 成果公表手段

研究活動の成果公表の手段についてたずねた結果を表 1.15 に示す．いずれの領域においても「学術雑誌論文」が最も多く 9 割前後の回答を得ているが，それ以外にも「専門書」「大学紀要」「学会での発表」など複数の情報メディアが成果公表手段として利用されており，自然科学領域ほどには学術雑誌論文の存在が絶対というわけではない．

表 1.15　研究成果を公表する手段（複数回答）

	日本史 (N=186)	世界史 (N=151)	東洋史 (N=112)	考古学 (N=62)
専門書	76.9%	69.5%	65.2%	56.5%
一般書	40.3%	28.5%	31.3%	30.6%
学術雑誌論文	89.8%	86.8%	94.6%	91.9%
一般誌の論文	24.7%	16.6%	24.1%	27.4%
大学紀要	76.3%	88.1%	70.5%	48.4%
日本の学会での発表	69.4%	66.2%	79.5%	79.0%
海外の学会での発表	15.6%	21.9%	66.1%	50.0%
学会での講演	25.8%	21.2%	24.1%	41.9%
シンポジウム	39.2%	34.4%	49.1%	61.3%
研究会での発表	64.5%	68.2%	75.0%	75.8%
一般の商業誌	9.1%	6.6%	6.3%	12.9%
研究成果報告書	43.5%	45.0%	58.0%	69.4%
個人のウェブサイト	6.5%	4.0%	4.5%	9.7%
データベース	6.5%	2.0%	7.1%	4.8%
その他	1.1%	0.0%	0.9%	0.0%

4.2 研究者自らによる情報発信

自らの研究成果を電子的な形態にして発信しているかどうかを調べるために，今回の調査では「ホームページの構築（作成・運営）」についてたずねた．「日本史」「西洋史」「東

洋史」では「ホームページを作っている」という回答がそれぞれ 15.6%，15.9%，15.2%と 2 割に満たなかったのに対して，「考古学」では 27.4%と多少ではあるが多いという結果になった．「ホームページの構築」を行っていると回答した研究者に，コンテンツの形態について回答してもらったところ，いずれの領域においても「書誌事項のみを公開」もしくは「自分で作成したデータベースや資料集へのリンク」が多いという結果となった．

5. 図書館の利用と認識

5.1 図書館への来館頻度

専門領域ごとの図書館来館頻度および自身の所属大学における歴史学科の有無（そこに所属しているかどうかも含めて）と図書館来館頻度との関係について，結果を表 1.16，表 1.17 に示す．

専門領域ごとの図書館来館頻度を見ると，週に 1 回以上来館するという回答が最も多く，4〜5 割という結果となった（表 1.16）．「週に 3 回以上」来館するというかなり利用頻度の高い回答者と合わせると，半数強から 7 割近い研究者が定期的に図書館を訪れていることがわかる．中でも日本史領域の研究者の利用頻度が極めて高く，考古学領域の研究者の利用頻度は多少低めに出ているというのが特徴である．

回答者の所属大学における歴史学科の有無（および自身がそこに所属しているかどうか）と図書館来館頻度との関係を見たところ，「学科なし」と回答した研究者のほうが，僅差ではあるが利用頻度が少ないという結果となった（表 1.17）．ただし，その差は本当にわずかなもので，統計的に有意な差はなかった．歴史学科を持っている大学に所属していたほうが，歴史学に特化したコレクションやサービスの形態が充実しているのではないかと予想していたが，そのような傾向は見られなかった．

表 1.16　専門領域ごとの図書館来館頻度

	日本史 (N=186)	西洋史 (N=151)	東洋史 (N=112)	考古学 (N=62)
週に3回以上	31.7%	16.6%	17.9%	14.5%
週に1回以上	47.3%	51.7%	49.1%	38.7%
月に1回程度	11.3%	18.5%	18.8%	21.0%
ごくたまに	5.4%	9.9%	10.7%	16.1%
ほとんど利用しない	2.2%	3.3%	2.7%	9.7%
無回答	2.2%	0.0%	0.9%	0.0%

表 1.17　所属大学における歴史学科の有無と図書館来館頻度

	学科有・所属	学科有・非所属	学科なし
週に3回以上	21.5%	26.0%	18.6%
週に1回以上	54.1%	38.6%	47.9%
月に1回程度	16.3%	18.9%	18.2%
ごくたまに	6.4%	10.2%	10.2%
ほとんど利用しない	1.7%	3.1%	4.7%
無回答	0.0%	3.1%	0.4%

5.2 機関リポジトリの利用と認識

「機関リポジトリ」について利用と認知度について確認したが，いずれの領域においても「知らない」という回答が 6 割前後という結果となった．知っているかどうかに関わらず，「利用経験がない」という回答は 8〜9 割に上っており，残念ながら利用度は極めて低い．一般的に，機関リポジトリに対する研究者の認知度は低いといわれているが，歴史学研究者も同様の傾向を持っているといえる．

表 1.18　機関リポジトリに対する認識

	日本史 (N=186)	西洋史 (N=151)	東洋史 (N=112)	考古学 (N=62)
知っている・利用経験あり	7.5%	15.2%	17.0%	12.9%
知っている・利用経験なし	22.0%	17.2%	23.2%	30.6%
知らない・利用経験なし	68.3%	66.9%	58.0%	56.5%
無回答	2.2%	0.7%	1.8%	0.0%

6.　調査結果から見る歴史学研究者の情報行動

最後に，ここまで報告してきた調査結果を歴史学研究者の情報行動を情報入手と成果公表に利用する情報メディアという観点から整理し，電子メディアの普及可能性についての考察を試みる．

はじめに「研究活動における情報入手」について整理すると，歴史学研究者は「史料」－日本史，西洋史，東洋史の領域に属している研究者であれば「文献資料」，考古学の領域に属している研究者であれば「考古資料」－を研究活動における最重要アイテムとしてとらえている．これは，できれば「現物」であることが望ましいが，考古資料を除けば，複写物でも使えると思っている研究者が多い．歴史学研究者は，これらの「史料」に加えて，

日常的に「学術書」や「学術雑誌論文」を利用しているが，彼らにとってのこれらの情報メディアの位置づけは「史料」を発見するためのツールということになりそうである．そして，それらの学術書や学術雑誌は個人で購入・購読しているものである場合が多い．したがって，研究活動のために図書館に頻繁に通うという行動パターンは起きにくい．

次に「研究活動に用いる史料や学術書・学術雑誌論文の探索」の側面を整理してみると，支配的な目録やデータベース等の存在は確認されなかった．歴史学研究者は，比較的緩やかなペースで多様な手段を用いて，情報探索を行っており，その中の一つには大学図書館の提供する OPAC も含まれているという状況である．すなわち，情報入手だけでなく，情報探索の側面においても，図書館への依存度が高まるという状況は生まれにくい．

ただし，今回の調査結果から，歴史学研究者であっても一定の頻度で図書館に来館しているということがわかっている．今回の調査では図書館来館の目的を聞くことができていないので推測の域を出ないが，歴史学研究者の図書館来館の主たる目的は，授業のための既知事項の確認等，教育的側面に関連する事柄にあるのではないかと思われる．

「研究活動における成果公表」の側面からとらえなおしてみると，「学術雑誌論文」が比較的多くの研究者に利用されているメディアであるということがわかる．ただし，自然科学の領域においては「学術雑誌論文」が唯一と言ってもよいほどの成果公表メディアとして認識されているのに対して，歴史学分野の研究者の場合にはそれ以外にも様々なメディアを利用している印象がある．

最後に，これらの傾向を勘案した上で，歴史学領域における電子メディアの普及可能性について言及したい．

本章においても随所で触れたとおり，歴史学研究者は情報入手に関しても成果公表に関しても，その行動には多様性が観察されている．研究活動において最も重要なのは「学術雑誌」や「学術書」というよりむしろ「史料」である．したがって，学術雑誌論文や学術書の検索に使える書誌データベースがあれば，情報検索の際に使えて便利だろうと思うが，そこから（インターネット上で即座に）論文の現物が手に入らないと研究にならない，というほどスピードを重視しているわけではない．必要があれば図書館など他機関に出向いてコピーするという状況で特に問題を感じてはいない．成果公表メディアとして利用しているものも，「学術雑誌」が筆頭であることには変わりはないが，「専門書」も「大学紀要」も同じくらい利用している．

ここから導き出せるのは，海外の出版社が学術雑誌を電子化し，それを図書館が提供するという形態が主流の現状の電子化には，歴史学研究者の行動はなじまないということである．彼らは電子メディアを嫌っている，もしくは存在を認めていないからそれを使わないのではなく，自分たちが本当に必要としているものが電子化されていないから使わないのである．

それでは，歴史学研究者の情報行動になじむ電子化の方向性とはどのようなものか．

(1)「学術雑誌」の電子化よりむしろ「史料」の電子化
(2)「学術雑誌」に加えて「学術書」「大学紀要」の電子化
(3) (2)において電子化されたもののポータル化

などが，現時点で考えられる歴史学分野の電子化の方向性であろう．その意味では，国立情報学研究所が作成し提供している NII 論文情報ナビゲータ Cinii は，この流れに沿った意義のあるものとして評価することができる．

今回の調査から，歴史学分野の研究者の情報行動の持つ多様性が明らかになった．ただし，利用実態を情報入手や成果公表など様々な側面から総合的に把握し，自然科学領域の調査結果との比較まで試みたために，視点が拡散し，利用実態を正確につかめたとは言い難い面もある．今後は，今回の調査結果を踏まえつつ，より詳細な情報メディア利用実態調査を継続的に行っていくことで，歴史学研究者が電子化環境をどのように受容していくかについての知見を得ることができると考える．

［付録：歴史学分野の情報源および電子メディア利用に関する調査：調査票］

各位

歴史学分野の情報源および電子メディア利用に関する調査　ご協力のお願い

近年，自然科学分野を中心に学術情報の多くが電子的な環境で利用できるようになってきております．特に電子ジャーナルに関しては，ここ数年で急激な普及を見せております．ですが，人文科学の領域においては，電子ジャーナルをはじめとする電子メディアの利用がそれほど一般的なものではないという意見も聞かれます．本調査は，国内の歴史学分野の研究者を対象として，情報源および電子メディアの利用実態を明らかにしようとするものです．科学技術振興機構から提供されています「研究開発支援総合ディレクトリ(ReaD)」から抽出しました 1,400 名の方々を対象とさせていただいております．皆様からいただいた回答はあくまで統計的に処理し，個票として使用することはありません．

年度末の慌しい時期に誠に恐縮でございますが，ご協力いただけますようお願い申し上げます．

2008 年 4 月 10 日(水)までにご回答いただければ幸いです．

集計結果をご入用の場合は，返信用封筒にご住所とご氏名をご記入ください．なお集計結果につきましては，5 月以降，下記 URL にも掲載いたします．

URL:　http://www.kc.tsukuba.ac.jp/~mamiko/history.html

問い合わせ先：　電話：029-859-1508　　電子メール：mamiko@slis.tsukuba.ac.jp
住所：305-8550　茨城県つくば市春日 1-2
筑波大学図書館情報メディア研究科　松林麻実子

調査票

[1] 年齢をお聞かせください.

1. 60 歳代～　2. 50 歳代　3. 40 歳代　4. 30 歳代　5. 20 歳代

[2] 現在の職位についてお答えください.

1. 教授　2. 准教授（助教授）　3. 講師　4. 助教（助手）
5. その他（具体的に：　　）

[3] ご自身の研究領域を時代・地域によって区分した場合，もっとも当てはまるもの一つに○をつけてください.

1. 古代日本史　2. 中世日本史　3. 近代日本史　4. 現代日本史
5. 古代西洋史　6. 中世西洋史　7. 近代西洋史　8. 現代西洋史
9. 古代東洋史　10. 中世東洋史　11. 近代東洋史　12. 現代東洋史
13. 考古学

[4] 勤務する大学には歴史学科（あるいはそれに類する学科・専攻）がありますか．また，その学科に所属していますか．

1. 歴史学科があり，そこに所属している
2. 歴史学科はあるが，それに所属はしていない
3. 歴史学科はない

[5] 研究活動を進める際に行う情報利用行動について，以下の項目を重要であると思う順番に並べ替えてください．

1. 専門書を読む　2. 史料（文献・図像・映像・音声・考古など）を利用する
3. 学術雑誌論文を読む　4. 一般誌の論文や一般書を読む
5. 学会で発表や講演を聴く　6. 他の研究者と議論する
7. 院生と議論する　8. ウェブサイト（ブログなど）で最近の話題・動向を知る
9. 史料の現物を見る（もしくはデータを収集する）ために他機関を訪問する
10. その他（具体的に：　　）

重要度

高　　中　　低

(　　)−(　　)−(　　)−(　　)−(　　)−(　　)−(　　)−(　　)−(　　)−(　　)−(　　)

[6] 研究活動を行う際に利用する資料についてうかがいます．

1) 研究に使う資料について，あてはまるもの全てに〇をつけてください．

1. 文献資料　2. 図像資料　3. 映像・音声資料　4. 民族資料
5. 考古資料　6. 学術雑誌論文　7. 学術書
8. その他（具体的に：　　）

2) 上記でお答えいただいた資料のうち，最も重要だと思われるもの一つをお答えください．

(　　)

[7] 研究に使う資料（雑誌論文・図書を除く）の形態について，最も当てはまるもの一つに〇をつけてください．

1.（資料）の現物　2. ゼロックス・コピー　3. 電子形態（CD-ROM/DVD-R など）
4. その他（具体的に：　　）
5. 雑誌論文・図書以外は使わない

[8] 研究に使う資料（雑誌論文・図書を除く）の入手手段について，最も当てはまるもの一つに〇をつけてください．

1. 個人で購入　2. 自分でインターネットで探して無料で入手
3. 他機関に出向いて閲覧・複写　4. 他の研究者からもらう・借りる
5. 所属機関の図書館で印刷媒体を閲覧　6. 所属機関の図書館で印刷媒体をコピー
7. 所属機関の図書館から電子形態で（電子ジャーナルなど）
8. 雑誌論文・図書以外は使わない

9. その他（具体的に：　　）

[9] 研究に使う資料（雑誌論文・図書を除く）を探す際に利用するもの全てに〇をつけてください.

1. 学術雑誌論文や学術書の脚注　2. 大学や博物館が作成したデータベース
3. 個人が作成したデータベース・リンク集　4. 同じ分野の研究者との議論
5. 史料を扱っている書店などのウェブサイト　6. Google 等のサーチエンジン
7. 専門機関（公文書館，博物館など）から提供される情報
8. その他（具体的に：　　）

[10] 学術雑誌（電子ジャーナル含む）の利用形態について最も当てはまるもの一つに〇をつけてください.

1. 定期購読誌をブラウジング　2. 図書館で現物を閲覧
3. 図書館で必要ページのみコピーで入手　4. 自分の PC で電子ジャーナルを閲覧
5. 学術雑誌（電子ジャーナル）は利用しない
6. その他（具体的に：　　）

[11] 雑誌論文や図書を探す際に利用するもの全てに〇をつけてください.

1. 学術雑誌の巻末目録　2. 書店の目録（冊子体・オンライン問わず）
3. 専門領域に特化した目録（冊子体）　4. 専門領域に特化した目録（オンライン）
5. 大学図書館 OPAC　6. 国立国会図書館 OPAC など
7. 個人が作成した文献リスト　8. 図書館や書店に出向いてブラウジング
9. Google 等のサーチエンジン　10. 雑誌論文や図書を利用しない（→設問 13 へ）
11. その他（具体的に：　　）

[12] 設問 11 でお答えいただいた資料を探す作業のおおよその頻度をお答えください.

1. ほぼ毎日　2. 週に 1 回以上　3. 月に 1 回以上　4. 数ヶ月に一回程度
5. 年に 1 回程度

[13] 電子ジャーナルを利用されますか．頻度をお答えください.

1. よく利用する（→設問 14 へ）　2. 時々利用する（→設問 14 へ）
3. 過去に利用したことがある（→設問 15 へ）　4. 利用したことがない（→設問 15 へ）
5. 電子ジャーナルがどのようなものかわからない（→設問 16 へ）

[14] 設問 13 で電子ジャーナルを利用する（1 もしくは 2 に〇）と回答された方にうかがいます．電子ジャーナルの性質のうち，重要だと思われるもの全てに〇をつけてください.

1. 印刷物と同じ内容が入手できること。　2. 印刷物では入手できない情報が得られること。
3. 24 時間いつでも入手できること。　4. 自宅など好きな場所から入手できること。
5. 印刷物よりも早く入手できること。　6. 論文や内容が電子的に検索できること。
7. その他（具体的に：　　）

[15] 設問 13 で現在電子ジャーナルを利用していない（3 もしくは 4 に〇）と回答された方に伺います．電子ジャーナルを利用しない理由について当てはまるもの全てに〇をつけてください.

1. 多数の論文をブラウジングしたい　　2. 紙のほうが読みやすい
3. 電子版へのアクセスに時間がかかる　　4. 印刷の雑誌が手近にある
5. よく読む雑誌が電子ジャーナルになっていない
6. 図書館が読みたい電子ジャーナルを契約していない
7. 現在のやり方に満足しており，変える必要性を感じない
8. 雑誌論文を読まない　　9. その他（具体的に：　　）

[16] 研究成果を公表する手段について，利用されているもの全てに〇をつけてください．
1. 専門書　2. 一般書　3. 学術雑誌論文　4. 一般誌の論文　5. 大学紀要
6. 日本の学会での発表　7. 海外の学会での発表　8. 学会での講演
9. シンポジウム　10. 研究会での発表　11. 一般の商業誌　12. 研究成果報告書
13. 個人のウェブサイト　14. データベース
15. その他（具体的に：　　）

[17] ご自分のホームページを構築（作成・運営）なさっていますか．
1. している（→設問 18 へ）　2. していない（→設問 19 へ）

[18] 設問 17 でホームページを構築（作成・運営）されていると回答された方にうかがいます．ご自分のホームページで研究成果を公表していらっしゃいますか．また，どのような形態で公開していらっしゃいますか．当てはまるもの全てに〇をつけてください．
1. 論文の全文を PDF で公開　2. 論文の全文を HTML で公開
3. 図書の一部を PDF で公開　4. 図書の一部を HTML で公開
5. 書誌事項のみ公開
6. 自身で作成したデータベースや資料集へのリンク
7. 何も公開していない

[19] 機関リポジトリをご存知ですか．また登録されたことはありますか．
1. 知っているし，登録したこともある　2. 知っているが，登録したことはない
3. よく知らない

[20] 所属機関の図書館（もしくは資料室）への来館頻度をお答えください．
1. 週に 3 回以上　2. 週に 1 回程度　3. 月に 1 回程度　4. ごくたまに
5. ほとんど利用しない　6. 図書館（資料室）がない

[21]現状の学術情報流通に関して問題だとお感じの点があれば，ご自由にご記入ください．

（　　）

以上です．ご協力ありがとうございました．

Ⅱ．日本近代文学研究者の研究活動における情報行動

岡野裕行

1. はじめに

人文科学，社会科学，自然科学などの学問領域を問わず，一般に研究者はそれぞれの学問分野に特有のさまざまな情報流通経路のなかから研究に必要な情報を取捨選択し，それらを収集することで個々の研究を進めている．科学コミュニケーションやビブリオメトリックスなどのキーワードのもとに，図書館情報学では長年にわたって研究者の情報行動に関する研究が行われているが，その対象となってきたのは主に自然科学分野の研究者である[1]．たとえば，先の日本図書館情報学会研究大会シンポジウムにおいて，松林麻実子が医学研究者の情報行動をもとにした報告を行ったことは，そのような研究者の情報行動研究史の流れに位置づけることができるだろう[2]．

松林は同シンポジウムの質疑応答の際に，会場からの質問に答える形で，“人文・社会科学分野の研究者は情報検索の量が少ないなど，自然科学系の調査とは異なる点に気をつける必要があり，慎重に進めなければならない”と述べている[3]．つまり研究者の情報行動のうち，人文科学分野の情報行動については，これまでに多くの情報行動研究の蓄積がある自然科学分野の研究成果をある程度参考とすることはできたとしても，それとは異なる文脈での調査が求められることになるという指摘である．

そこで本稿では，人文科学分野のなかでも特に日本近代文学研究に注目し，それに携わる日本近代文学研究者が一般にどのような情報行動のもとに研究活動に取り組んでいるのかについて考えてみたい．その際には，筆者の周辺で実際に文学研究に取り組んでいる複数の研究者へのインタビューをもとにその情報行動の現状をまとめ，そこから今後の情報行動研究の課題を探ることにする[4]．

なお，本稿ではこれ以降特に断らない限り，日本近代文学研究者の意味で単に文学研究者，日本近代文学研究の意味で単に文学研究という用語を用いることにする．

2. 文学研究者の情報収集行動

文学研究者の情報行動は，文学研究のための素材を探し求める情報収集行動と，自らの研究成果を世に広めるための情報公開行動とに分けて考えることができる．ここではまず，文学研究者の情報収集行動について考えることにする．

2.1 一次資料

文学研究者の情報収集の基本となるのは，何をおいても一次資料としての冊子体資料である．それには学術書として刊行されている文学研究書や，文学系の学会や大学などの研究機関が独自に出版している学術雑誌に掲載された学術論文などがある．また，文学研究の場合は研究対象となるテクストが必要となるため，それらの作品を収録した単行書や全集，初出となる雑誌や新聞などの入手も不可欠となる．

2.1.1　冊子体の学術雑誌

学会や研究機関の規模は，全国規模の会員を擁する大規模のものから大学や研究機関内に設置された小規模の研究会に至るまで大小さまざまな形態があり，それぞれの団体が独自の学術雑誌を定期刊行物として出版している．文学研究の領域における学術雑誌には，たとえば以下のようなものを代表例として挙げることができる．

①日本近代文学会編『日本近代文学』　②昭和文学会編『昭和文学研究』
③日本文学協会編『日本文学』　④東京大学国語国文学会編『国語と国文学』
⑤京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』
⑥至文堂編『国文学：解釈と鑑賞』　⑦岩波書店編『文学』

全国規模の学会が出版する①②③，大学などの研究機関が出版する④⑤などの学術雑誌以外にも，⑥⑦のように特定の出版社が文学を対象とした雑誌を出版していることもある．以上に挙げた雑誌は，いずれも文学領域に関するコア・ジャーナルに該当する．しかし，文学領域の研究成果は言語学や歴史学，教育学，文化人類学などの周辺領域の学術雑誌にも掲載されることがあるため，いわゆるコア・ジャーナル周辺の学術雑誌にも目を配らなければ，網羅的な情報収集を行うことはできないと考えられる[5]．図書館情報学の領域でしばしば言及される応用地球物理学（自然科学領域）の雑誌をもとに導き出されたブラッドフォードの法則は，日本近代文学（人文科学領域）を対象とした場合にも同じように当てはまることになると考えられるだろう[6]．

しかし，近年の動向として，雑誌メディアの縮小化が進行しているという現実もある．たとえば，⑥の版元である至文堂が経営統合されたことにより，2009 年 5 月号からその版元がぎょうせいへと変更されたことは記憶に新しい．また，至文堂による⑥と並行する形で，長きにわたって文学領域の学術雑誌であり続けた學燈社編『國文學：解釈と教材の研究』については，経営上の都合によって 2009 年 7 月号を最後に休刊するに至っている．昨今の文学領域の学術雑誌を取り巻くこの一連のできごとは，学術論文の発表媒体としての学術雑誌というメディアの維持が困難になりつつあり，安定した出版活動が難しくなったことの現れと捉えることができるだろう[7]．

2.1.2　学術論文のデジタル化

本稿の冒頭で言及した松林は，同じシンポジウムの報告のなかで以下のような意見も述べている[8].

> 情報検索を左右する大きな要素として，データベースを制限なしに使えるかどうか，すなわちオープンアクセスかどうかという点があると考えられる．我々の研究グループの調査では，オープンアクセスの数が着実に増えているという結果が出ている．生物医学分野の状況では，雑誌自体がオープンアクセスであるケースが最も多く，これが情報検索の主体となっている．さらには，公的アーカイブとしての Pubmed Central や J-STAGE などの寄与も大きい．

以上に示されている Pubmed Central や J-STAGE などは，松林らによって自然科学分野（医学研究者）における研究成果の公表に大きく寄与していることが明らかにされている．J-STAGE の位置づけが“日本国内の科学技術情報関係の電子ジャーナル発行を支援するシステム”となっているように，そもそもそれらのデータベースは自然科学分野の研究成果の公表にふさわしい仕組みとして構築されているものである[9]．そのため，人文科学分野（文学）の学術情報流通の手段としてそれを利用することは現実的に困難である．人文科学分野において，広く研究成果を公にする手段として既に実現化がなされているものは，近年発達が著しい機関リポジトリである．

機関リポジトリを構築しているそれぞれの大学では，学内の研究成果を積極的に広く一般公開している．文学研究の成果をフルテキストデータとして公開している機関リポジトリには，以下のようなものを代表的なものとして挙げることができる．

①東京大学文学部国文学研究室編『東京大学国文学論集』は，東京大学の機関リポジトリ「東京大学学術機関リポジトリ：UT Repository」で公開されている[10].
②筑波大学国語国文学会編『日本語と日本文学』は，筑波大学の機関リポジトリ「つくばリポジトリ（Tulips-R）」で公開されている[11].
③同志社大学国文学会編『同志社国文学』は，同志社大学の機関リポジトリ「同志社大学学術リポジトリ」で公開されている[12].
④兵庫教育大学言語系教育講座前田研究室編『兵庫教育大学近代文学雑志』は，兵庫教育大学の機関リポジトリ「HEART：Hyokyo Repository」で公開されている[13].
⑤広島大学近代文学研究会編『近代文学試論』や広島大学国語国文学会編『国文学攷』は，広島大学の機関リポジトリ「広島大学学術情報リポジトリ」で公開されている[14].
⑥広島女学院大学日本文学会編『広島女学院大学国語国文学誌』は，広島女学院大学の機関リポジトリ「HARP：広島県大学共同リポジトリ」で公開されている[15].
⑦九州大学日本語文学会編『九大日文』は，九州大学機関リポジトリ「九州大学学術

情報リポジトリ（QIR）」で公開されている[16].

⑧別府大学国語国文学会編『別府大学国語国文学会』は，別府大学機関リポジトリ「別府大学機関リポジトリ（BUILD）」で公開されている[17].

以上のように，昨今の文学研究の成果については，機関リポジトリを通じて広く一般に公開する動きが進んでいる．ただし，これらはあくまで大学側が推し進めている取り組みであるため，自らの研究成果である学術論文や研究ノートを機関リポジトリに登録し，広く一般公開することの意義について，個人レベルで理解していない人文科学分野の研究者も存在する[18]．また，文学系の学会側からのデジタル化の取り組みも進んでおらず，相変わらず冊子体の学術雑誌を配布するのみで研究成果を公開しているのが現状である．

以上に挙げた機関リポジトリは，いずれも日本語文献を PDF ファイル形式でフルテキストデータを無料公開する仕組みとなっているが，昨今の文学研究においては海外の文学研究者の手による研究の進展も著しい．そのような動向は，表 1 に示したように，国際シンポジウムの報告が定期的になされていることからも確認することができる．また，海外の研究者によって発表された英語文献の調査については，主に MLA International Bibliography，JSTOR，Project Muse などのデータベースが利用されている[19][20][21].

表 1　近年の『日本近代文学』誌上の国際シンポジウムに関する文献

①吉田司雄．海外で日本語で発表すると言うこと：EAJS の国際会議に触れながら．日本近代文学．2006，no.75，p.247-253.

②上田正行．日韓合同日本近代文学研究会の五年間．日本近代文学．2006，no.75，p.254-260.

③ナムティップ・メータセート．タイにおける日本文学受容と研究．日本近代文学．2007，no.76，p.294-304.

④榊敦子．北米における日本文学研究の昨今．日本近代文学．2007，no.76，p.305-310.

⑤ドラージ土屋浩美．北米における日本近代文学研究：女性文学研究・大衆文学研究を通して．日本近代文学．2007，no.76，p.311-318.

⑥鈴木登美．グローバル時代における文学・文化研究の新たな可能性：「谷崎潤一郎パリ国際シンポジウム：境界を超えて」に参加して．日本近代文学．2007，no.77，p.270-276.

⑦内藤由直．イタリア観の一世紀：旅と知と美：Immagini d'Italia in Giappone un secolo di testimonianze．日本近代文学．2007，no.77，p.290-294.

⑧小林実．ローカル化とグローバル化の間で：北京日本学研究センター　二〇〇七年国際シンポジウム「二十一世紀における北東アジアの日本研究」．日本近代文学．2008，no.78，p.346-350.

⑨井内梨絵．イタリアにおける日本文化，文学の受容について．日本近代文学．2008，no.79，p.152-158.

⑩吉本弥生．「石川淳と戦後日本：国際日本文化研究センター　第三十四回国際研究集会・オハイオ州立大学協賛」に参加して．日本近代文学．2008，no.79，p.163-167.

2.1.3　画像データベース

近年では図書資料のテクストの全文を画像データとして公開する取り組みも進んでおり，それらの積極的な研究利用がなされている．具体的な事例としては，国立国会図書館が提供している「近代デジタルライブラリー」のように，著作権の切れた明治・大正期の資料を中心としてデータを公開しているものがある[22]. あるいは東京大学総合図書館の「鷗外文庫書入本画像データベース」のように，森鷗外本人の書き込みがある資料を画像データに変換し，それを無料で一般に公開するというプロジェクトも実現化されている[23]．また，八木書店は「Web 版日本近代文学館」というプロジェクトを進めており，現時点で『太陽』『文芸倶楽部』『校友会雑誌』の 3 誌についての画像データベースを販売している[24].

また，著作権が切れている作品については，Google ブックスのような図書の全文検索を可能にするサービスによって，適宜活用することもできるようになっている[25]. ただし，それはデータの信頼性が確かではないという点で注意が必要となる．そのため，論文のなかで利用しようとする場合には，信頼されたデータベースしか利用しないという原則を設けるなどの配慮が求められる一方，出典が疑わしい場合には常に冊子体資料で確認できるようにしておかねばならない．また，英語のデジタル図書の入手については Questia などを利用することもある[26].

このような画像データベースの利用については，前述した「鷗外文庫書入本 画像データベース」プロジェクトを担当した河野至恩が以下のように述べている[27].

> 「鷗外文庫」の資料は，鷗外の手稿もしくは手沢本であるという点において，唯一無二の貴重な資料である．今回のプロジェクトを通して書誌情報，また書入れ本の画像がデジタル化され，インターネットを介して世界中からアクセスできることの恩恵は計り知れない．その一方で，デジタル化されている情報が特権化されないか，むしろデジタル化しえないモノとしての本の特性にこそ貴重な情報が隠れているのではないかという問いを忘れてはならないであろう. 具体的には，書入れの筆記具の素材（万年筆，鉛筆等），鷗外が分解・製本に用いた材料など，情報に変換される以前の本の特徴も貴重な情報である.

一般に貴重資料は，安定的な資料保存と積極的な資料活用というような相反する要求の双方を満足させなければならない. それを実現するためには，「鷗外文庫書入本画像データベース」プロジェクトのような画像データベースの普及が欠かせない．河野による“デジタル化しえないモノとしての本”という指摘は，文学研究において画像データベースを利用しようとする際の注意点として，文学研究者に対する留保を与えていると評価できるだろう.

2.2　二次資料

2.2.1　個人書誌などのレファレンスツール

文学研究を行うに際しては，テクストを確定するために底本の選択が必要となる．特に人気のある作家の場合などは，同一作品について複数の異版が出版されていることがしばしば見受けられる．そのため，全集という形で作品群がまとめられている場合には，それを底本として選択することが一般的である．しかし，全集が出版されていない場合には，いずれの版を用いるのかのテクストの確定作業が必要となる．また，文学研究を行う際には単行本や全集のような図書の形態に注目するだけではなく，雑誌や新聞などの初出文献の存在をも考慮に入れなければならない．特にテクスト分析を主体とする文学研究者の場合,直筆原稿を見たり新資料を発掘したりすることに重きを置くような研究ではないため,分析対象とするテクストの選出こそが大きな課題となってくる．研究を進める上で，作品が掲載された初出の雑誌や新聞にも随時目を通す必要があり，原本を確認するために，文献複写や ILL を有効に活用するなどの方法で研究を進めている．

以上のような異版や初出の確認を行うためには，個人書誌や集合書誌などのレファレンスツールを用いることで，研究に必要な文献の書誌情報を得ることになる．レファレンスツールはそれが出版された時点での網羅性を追求した内容になっているが，どれだけ手間暇をかけて作成された書誌だとしても，必要な資料の見落としによる収録漏れの可能性が残るため，完璧な網羅性が期待されるものにはなっていない[28]．また，時間の経過とともに収録対象とすべき新たな文献が出版されることになるため，継続的に文献調査を行い，その成果を追補や増補版という形で改めて世に公開し直すことも必要となる．

また，新聞や雑誌に収録されている記事などは文献データベースに収録されていないこともあるため，文学研究に必要な新たな文献調査のためには，雑誌や新聞のページをひたすらめくり，それらを通読することで新資料の発見に繋げることがある．そのような通時的な調査を簡便に行うためには復刻版を活用することが有効であり，それが出版されていることで体系的な調査が可能となる[29]．復刻版が出版される際には総目次が付されることもあるが，それらは文学研究を進める際に簡便な調査を可能にしてくれるため，大きな効果を発揮することになる．あるいは，図書館や文学館などが作成した冊子体目録などにひたすら目を通したり，他者の論文のなかで引用されている文献について，書誌情報をもとに改めて原本を確かめたりするなど，さまざまな方法を用いることで必要な参考文献の存在を確認しなければならない．

2.2.2　文献データベース

日本語資料のうち，図書に関する情報収集に関しては，主に国立国会図書館の NDL-OPAC や国立情報学研究所の NACSIS Webcat などの目録データベースが中心となっている[30][31]．また，外国語資料の検索については，Library of Congress の OPAC が積極

的に用いられている[32]．それ以外にも，Amazon などのネット新刊書店，「日本の古本屋」や「スーパー源氏」などのネット古書店が整備している目録情報から思いもよらない情報を得たりすることもある[33][34]．特に古書店のウェブサイトから得られる情報は，それまでに判明していなかった文献を掘り出し物として見出すことができるため，定期的に確認することが欠かせない．図書の内容確認については書店や古書店の店頭，あるいは図書館などで現物を手に取ることで行うことになる．また，学会に参加した際に出展している出版社のブースを訪れ，新刊書の現物をこまめにチェックすることで新刊情報を得ることもある．

また，雑誌論文の検索については，データベースが普及する以前はもっぱら『国文学年鑑』などの冊子体目録をめくることが主流だったが，現在ではインターネットを介して随時更新される国立国会図書館の「雑誌記事索引」，国文学研究資料館の「国文学論文目録データベース」，国立情報学研究所の CiNii などが積極的に活用されるようになっている[35][36][37]．このような研究ツールの変化は古典文学研究の領域でも同様であり，冊子体の『国書総目録』や『古典籍総合目録』を使用していた頃とは異なり，国立情報学研究所の CiNii や国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録」などの使用に情報行動が変化しているのが現状である[38]．また，国立国会図書館の雑誌記事索引の目次情報が RSS で公開され始めたことに伴い，それを積極的に情報収集に活用するような文学研究者も出現している[39]．

このようなデータベースの普及による研究発展の事例の一つに，現在国立国会図書館の NDL-OPAC や「占領期新聞・雑誌情報データベース」によって広く一般に提供されているプランゲ文庫がある[40][41]．プランゲ文庫と文学研究の発展の関係については，時野谷ゆりが以下のように述べている[42]．

> ここ数年，文学作品と言論統制をめぐる問題系の中で，特に占領期の GHQ/SCAP（General Headquarters / Supreme Commander for Allied Powers）による文学作品への検閲問題が活発に論じられてきた．それは，二〇〇二年一一月の「占領期雑誌記事情報データベース」（代表 山本武利）のインターネット公開によって，GHQ の検閲資料を収録した「プランゲ文庫」の広範な調査が可能になり，研究の可能性が一気に開かれたことを一つの契機としている．現在では，約一九六万五〇〇〇件の雑誌記事について，検閲の有無を瞬時に調べることが可能になった．（中略）
>
> そして，データベース公開以後，江藤氏以来の，占領期の言説空間を閉塞的で抑圧されたものとする立場を問い直そうとする試みが重ねられてきた．すなわち，プランゲ文庫の資料を活用することで，作家，編集者，雑誌メディアの検閲に対する多様な対応，事前検閲から事後検閲への移行に伴う問題，検閲官の現場での対応といった面を一つ一つ具体的に検証し，当時の言説空間を捉え直そうとする試みである．

つまり，コンピュータを用いた情報検索の進展が新たな研究方法の提供に繋がり，それによって明らかになる研究成果が増加しているという指摘である．プランゲ文庫を収録し

た「占領期新聞・雑誌情報データベース」は，コンピュータの性能を積極的に活用したツールの出現によって新たな研究成果が生み出されるという恰好の事例となっている．

2.3　文学館

日本近代文学研究においては，文学資料を体系的に収集・保存している文学館の存在が大きな影響力を持っている．そのなかでも特に日本の文学館の中心的な存在となっている日本近代文学館などは，1962 年の設立以降，今日まで約半世紀にわたって文学研究者の研究活動を積極的に支え続けている．規模の大小を問わなければ，文学館は 2010 年 2 月 19 日現在で日本全国に 705 館を数えることができる[43].

2.3.1　資料調査

元日本近代文学館理事長の中村稔が，“文学館の本来の使命は，文学資料，すなわち，肉筆原稿，初出誌，初版本，推敲をへた後日の刊本，日記，書簡，創作ノート，書き入れ本その他の蔵書，さらに研究書等をひろく収集，保存，整理し，研究者等の閲覧に供することにある．きわめて限られた少数の読者のための図書館的機能を果たすことが本来，文学館の役割である”と述べているように，文学館は文学研究のための専門図書館としての役割を果たすために設立されるという側面がある[44].

たとえば，庄司達也は改造社による『現代日本文学全集』の宣伝に関連した「講演映画会」の実態調査のため，共同研究の場を九州地方に設けた理由を以下のように述べている[45].

> 調査対象地域を九州地方とした理由は，改造社社主の山本実彦の郷里が鹿児島県の川内であったことが第一にあげられる．二〇〇四年，山本実彦の遺族から寄贈された資料類を一つの柱とするコレクションを有した川内まごころ文学館が，現在の薩摩川内市に誕生した．この文学館に所蔵されている改造に関連する資料群は膨大である．筆者らの調査活動のはじめにこの文学館を訪ね，協力を要請することは意味のあることだと考えたことにもよる．そして，九州という東京から遠く離れた地域での宣伝活動を把握することが，全国で一斉に行われた宣伝活動の全体像の解明に益すると考えられたからでもある．

つまり，文学研究において調査対象となる場合の貴重資料は現存するものが一点限りのものであることが多く，それを保存している施設に自ら足を運ぶことは調査研究を行う上で不可欠である．しかし，このような資料調査については，地理的要因に大きく左右されてしまうことが多い．たとえば，今回のアンケート調査で筆者に回答を寄せてくれたとある地方の大学に勤務している研究者は，必要な文献調査を行う際には週末に東京に出向き，国立国会図書館や日本近代文学館などで文献調査をするような状態だと話している．この

ことは，文学研究のすべてがウェブサイト上の情報のみで可能なわけではないということを示唆している．

また，貴重資料の場合はどこにどのような資料が存在し，どの施設を探せばいいのかという知識は，単にデータベースを利用しているだけで身につけることは難しいということもアンケートの回答のなかで指摘されている．実際に文学館に通って資料の現物に触れたり，文学館の館報のバックナンバーを読み込んだりするなかで，文学資料の所在やその利用の仕方への理解を個人の感覚として養っていくことも重要な作業となる．

2.3.2　資料展示

文学館が行っている展示が文学研究者へと与える影響については，たとえば武藤康史が日本近代文学館で開催された展示を観た上で，以下のような感想を抱いていることに注目してみたい[46]．

> 日本近代文学館の「時を超えて――漱石，芥川，川端」という展示では芥川の机を見たが，これは芥川の結婚祝いに夏目鏡子夫人が贈ったものだという．机の上にあるのは《「続西方の人」を書き上げたと思われるペン，漱石をまねた茶合のペン皿など》と図録に説明してあったが，そのペンはいわゆる付けペンである．
>
> 付けペンなんて，私の経験では原稿用紙二，三行しか持たない．いちいちインク壺に入れるのでは思考が中断して大変だろうな．でも付けペンで中断しつつ書いたから芥川のああいう文体になったのかしら？　……などと想像がふくらむけど，たぶん間違った想像だろう．

武藤の記述に見られるように，文学館に展示された資料に触発され，そこから文学作品の成り立ちを類推できるようなことも起こりうる．表 2 に示すように，2007 年以降の『日本近代文学』誌上では，各地方の文学館の展示会の様子が「イヴェント・レヴュー」という特集記事の形で紹介されるようになるという変化が見られた．文学館の展示から得られる日本近代文学研究上の知見については，表 2 に挙げた各執筆者がそれぞれの立場から詳しく評価を行っている．このような特集記事は2006年以前には見られなかったものだが，学会誌のなかで積極的に取り上げられるように変わってきたことからは，文学館における展示という活動が，文学研究者に対して定期的に報告するに値するものとして認識され始めたことを示唆していると考えられるだろう．

表 2　近年の『日本近代文学』誌上に発表された文学館における展示情報

①安田孝.「森 鷗外と美術」展：近代日本における油彩画の変遷．日本近代文学．2007，no.76，p.319-322.

②加藤禎行．シンポジウム「江戸から明治へ：仮名垣魯文を中心として」と特別展「仮名垣魯文百覧会」．日本近代文学．2007，no.76，p.323-326.

③今川英子．北九州市立文学館オープン：文学館の可能性を求めて．日本近代文学．2007，no.76，p.327-330.

④鳥羽耕史．文学館の役割：貴司山治展とブンガクな時代展をめぐって．日本近代文学．2007，no.76，p.339-342.

⑤加藤邦彦．中原中也生誕百年に思う：いくつかのイベントに参加して．日本近代文学．2007，no.77，p.277-281.

⑥杉本優．山梨県立文学館企画展「高村光太郎　いのちと愛の軌跡」．日本近代文学．2007，no.77，p.281-285.

⑦小倉斉．澁澤龍彦，没後二〇年目の再生．日本近代文学．2008，no.78，p.328-331.

⑧宇治土公三津子．日本近代文学館の記念行事「近代文学の至宝」展．日本近代文学．2008，no.78，p.337-341.

⑨水沢不二夫．埴谷雄高『死霊』展：神奈川県立近代文学館．日本近代文学．2008，no.78，p.342-345.

⑩片山晴夫．特別企画展「有島三兄弟：それぞれの青春」に想う．日本近代文学．2008，no.79，p.159-162.

⑪守安敏久．「寺山修司　劇場美術館 1935-2008」展：没後二十五年の寺山修司．日本近代文学．2008，no.79，p.168-171.

⑫山口直孝．絵葉書による友情：「志賀直哉をめぐる人々展」および『志賀直哉宛書簡集　白樺の時代』について．日本近代文学．2009，no.80，p.224-227.

⑬宗像和重．「若き久米正雄・芥川龍之介・菊池寛」展から：第四次『新思潮』の草稿・原稿・校正刷をめぐって．日本近代文学．2009，no.80，p.228-232.

⑭近藤耕人．小島信夫展（二〇〇八年六月十三日―十二月二十五日　岐阜県図書館）：「裸木」にエロスを垣間見る．日本近代文学．2009，no.80，p.233-236.

⑮日置俊次．現代日本は「乱世」であるのか：「堀田善衛展　スタジオジブリが描く乱世.」を観て．日本近代文学．2009，no.80，p.237-240.

⑯橋本直．山梨県立文学館「飯田龍太展」．日本近代文学．2009，no.80，p.241-243.

⑰大塚美保.「森鴎外展―近代の扉をひらく」をめぐる虚構座談会．日本近代文学．2009，no.81，p.342-346.

⑱秋尾敏.「虚子没後五十年記念　子規から虚子へ：近代俳句の夜明け」展を見る．日本近代文学．2009，no.81，p.347-350.

⑲上田穂積.「生誕一二〇年記念　生田花世展」：再・発見，そして地域文学の行方．日本近代文学．2009，no.81，p.351-354.

⑳茶園梨加．何のために，どこにむかって，走るか：福岡市文学館企画展「大西巨人　走り続ける作家」．日本近代文学．2009，no.81，p.355-359.

2.3.3　出版物

文学館が行っている諸活動の成果なかでも，文学研究者が幅広く利用しているものに，文学館が発行しているさまざまな出版物がある．既に筆者は 2006 年に提出した博士論文のなかで，日本全国 76 館に及ぶ文学館の出版物を網羅的に調査した上で以下のように論じている[47].

> つまり文学館という場は，日本近代文学研究を行うための中心的施設となるが，そこには館外の日本近代文学研究者や他の学術系の出版者が，自分たちの思いを形にするべく，それぞれの思惑で足を運んでくる場だと言えるだろう．日本近代文学研究者は，文学館から持ち帰った知識を元に新しい知見を次々と発表し，出版者は文学館が所蔵する資料を次々と記録に収めることで商売を行い，結果として日本近代文学研究に寄与する図書を次々と発行している機関ということが明らかになった.

文学館の出版物のなかでも，特に日本近代文学研究において重要な出版物として位置づけられるのは，日本近代文学館が約 20 年間（1960 年代半ばから 1980 年代半ば）にわたって積極的に取り組んでいた，初版本や雑誌に関する一連の復刻事業である．以前に筆者が指摘しているように，“復刻を希求する研究者人口の増大（需要）と，印刷技術の進歩による復刻製作の低コスト化（供給）のタイミングがうまく合致したことで，復刻は出版事業として成長を続け，結果として日本近代文学研究にとって重要な資料が数多く世に出され，多くの研究者の益するところとなった”という事情がその背景にあったために可能となった出版事業である[48].

筆者の博士論文は，文学館の出版事業の重要性を指摘した研究の嚆矢となっているが，それに続くように，多くの文学研究者が文学館の出版物の重要性を指摘する意見を出している．たとえば，展示会の開催に併せて作成される図録の類の意義について，宗像和重がこおりやま文学の森資料館で開催されていた久米正雄，芥川龍之介，菊池寛の展示の図録をもとに，“展示の監修・協力者で，この図録にも文章を寄せている庄司達也・伊藤一郎両氏の熱意によるところが大きいことと推察するが，Amazon でも買えない（！）こういう展覧会の図録類が，実は一番貴重で希少性が高いことは，いうまでもない”と述べている[49]. あるいは，庄司達也は川内まごころ文学館における山本実彦関係資料の調査の過程で，“それらの多くは，常設の展示や企画展での展示などで，或いは館の発行する図録によって広く公開されている．また，今秋には，DVD を媒体としてそれら作品の原稿を収めた資料集が刊行される”と述べた上で，“所蔵資料の全体像は既に示されているので，研究者による今後の活用とそれによる研究の進展が期待される”とまとめている[50]．宗像や庄司の意見は，いずれも文学館の出版物がいかに日本近代文学研究に対して大きな影響を及ぼすのかについて指摘しているものであり，文学研究者の研究行動の現状を教えてくれるものとなっている.

2.3.4　検索システム

筆者が先行研究としてまとめているように，文学館のなかには所蔵資料を公開するための検索システムの提供を行っているものがある[51]．その後の調査結果を加えると，現時点では以下に示す 14 の文学館が情報提供を行っていることが確認できる．

①日本近代文学館[52][53]　②神奈川近代文学館[54]　③日本現代詩歌文学館[55]
④大阪府立国際児童文学館[56]　⑤北海道立文学館[57][58][59]　⑥青森県近代文学館[60]
⑦仙台文学館[61]　⑧群馬県立土屋文明記念文学館[62]
⑨水と緑と詩のまち前橋文学館[63]　⑩さいたま文学館[64]　⑪山梨県立文学館[65]
⑫徳島県立文学書道館[66]　⑬武者小路実篤記念館[67]　⑭若州一滴文庫[68]

複数の検索システムを並行して提供している文学館もあるため，併せて 17 種類の検索システムの存在を確認できる．筆者は以前，以上のような文学館が提供する検索システムについて，「公式機関としての信頼性」「存在情報の公開」「所在情報の公開」「詳細な解説の付与」という 4 点からその課題を指摘している[69]．現在では，公式のウェブサイト上での所蔵資料に関する情報公開を行っている文学館はごく一部に限られており，そのような取り組みはそれほど発達しているわけではないことが明らかになっている．しかし，MLA（Museum，Library，Archives）の連携の重要性が叫ばれる昨今では，その三つのいずれの領域にも深く関わっている文学館側からの積極的な情報公開が求められることになるだろう．それはまた，画像データベースの出現などと同様に，文学館利用者としての文学研究者の情報行動のあり方を変化させる可能性を持つものと考えられる．

また，データベースという形でなくとも，ウェブサイト上に掲載された書誌情報から文学研究に必要な情報を提供する方法もある．たとえば，松村良は学習院女子大学と尾道大学附属図書館に分割して所蔵されている高橋新太郎文庫について，以下のように述べている[70]．

> こうして高橋氏の蔵書は，奇跡的に二つの大学に分割されて，その全体が保存されることになった．東京に一括して保管されていた時に，私は何人かの知り合いの研究者に声を掛けて，今のうちに見に来るように誘ってみた．夏休みにカストリ雑誌等を調査しに来た人もいたが，高橋氏のコレクションはかなり魅力的であったらしい．現在カストリ雑誌は，創刊号を除いて全て尾道大学にあるので，東京で見ることは出来なくなってしまったが，それでも，インターネットでの検索から高橋新太郎文庫のホームページに辿り着き，雑誌の閲覧やコピーを申し込んでくる人が何人もいる．将来，二つの大学の蔵書リストがインターネット上で接合して，高橋氏のコレクションの全貌をより多くの人が知ることが出来るようになればと思う．

現在，高橋新太郎文庫の資料一覧の情報は膨大な表の形にまとめられてウェブサイト上に公開されており，さらに“研究機関への貸し出しを行っています（個人研究者への貸し出しは学校等団体を窓口にしています)”との断り書きがなされているように，文学研究目的の利用者に対する協力体制が敷かれている[71]．高橋新太郎文庫の情報はデータベースという形態ではなく，ウェブサイト上に html 形式で記述されているため，Google などのサーチエンジンによる情報検索に対応する形となっている．文学資料についての情報公開は，必ずしもデータベースという形態を取らなくとも，サーチエンジンによる検索に対応できる形にデータを整備しておけば，それを探し出して研究利用しようとする文学研究者が現れるということの恰好の事例となっている．

2.4　インフォーマル・コミュニケーション

チャールズ・シロー・イノウエは美術研究者と文学研究者の双方について，“鮎のようにそれぞれの縄張り意識が強く，交流がほとんどない．その結果として，例えば，近代意識の発展における写実主義の意味を理解することが難しくなっているし，近代小説がもたらした近代意識の変革や社会現象の動きを今まで以上に理解することはむずかしい”と述べることで問題点を指摘し，その解決策として以下のような提案を行っている[72]．

> 近代文学の現状について一つの提案をするならば，色々な専門家の活発な交流を勧めたいと思う．私たちの仕事はどうしても専門的になってしまうので，普段会わない他の研究者たちと話し合う機会を作っておかなければならない．日文研はこの重要な役割を果たそうとしているが，近代文学会や近世文学会も，幅広く「日本」と「近代」と「文学」を徹底的に考えればいいと思う．いわゆる学際的（interdisciplinary）な方法を取り入れるだけでなく，それに，国際的（international）な視野をもって，色々な時代（interperiodical）を幅広く見る研究も勧めたいと思う．

つまり，研究者が自分の領域内に閉じこもるだけではなく，自分とは異分野のさまざまな研究者と直接に話し合うような機会を積極的に求める必要性を説いている．しかし，前述したような地理的要因の問題は，このようなインフォーマル・コミュニケーションに対しても影響を及ぼしており，地方在住者は文献調査の面において環境的に不利な状態にある一方で，学会や研究会の面でも気軽な参加ができない状態にある．

都市部に比べて地理的に不利な状況を解決できるか否かは可能性として未知数の状態だが，ある程度そのような距離の問題を克服するツールとして，現在ソーシャルコミュニケーションツールとして発展を遂げているツイッターの利用が考えられる[73]．ツイッターユーザー名@helpline が作成している文学研究の関係者のリスト@helpline/kokubun によれば，2010 年 2 月 19 日現在で 32 名の登録がなされていることが確認できる[74]．その人数が

果たして多いのか少ないのかを現時点で判断することはできないが，ツイッターそのものが流行し始めてからまだ日が浅いため，それを用いることで日本近代文学研究にどのような影響がもたらされるかはまだ先が読めない状態にある．この点に関してはもうしばらく経過を見守り，改めてその効果や動向を調査していく必要があるだろう．

2.5　出版社

文学系の出版社としては，笠間書院の公式サイトがほぼ毎日文学にまつわる情報をブログ形式で更新している[75]．同サイトでは文学に関する「学会・講演会・展覧会情報」「ホームページ紹介」などのコンテンツを用意しており，また，自社の「新刊案内」を行うだけではなく，他社からの献本を「いただいた本・送られてきた本」として随時紹介しているため，日本文学の総合的な新刊情報が把握できるような内容構成となっている．近代文学領域に限らず，古典文学や近世文学なども含めた幅広い文学研究情報を継続的に収集・公開しているため，多くの文学研究者が研究活動において参考とするツールとして発展を遂げている．

また，同社の発行する逐次刊行物『リポート笠間』は単に自社の新刊情報を掲載する出版目録としての役割だけではなく，文学研究者同士の座談会やインタビュー記事なども掲載されており，文学研究者の情報発信に一役を買っている．それと同様のものには和泉書院が発行している『いずみ通信』などもあり，こちらも定期的にさまざまな文学研究者の研究ノートの類を収録することで，文学研究の裾野を拡げることに寄与している[76]．

3.　文学研究者の情報公開行動

ここからは文学研究者の情報行動のうち，情報公開行動について考えてみたい．

3.1　論文発表

文学研究者の情報公開においては，基本的には学術雑誌での論文発表が主体となっている．学術雑誌への論文発表の際には査読者によって内容の査読が行われるが，その問題点について宗像和重が以下のような指摘を行っている[77]．

①査読のシステムは査読担当の編集委員の負担によって成り立っている状況にあり，それ自体が一種の制度疲労を起こしている．

②利害相反者になる可能性を有する研究者（研究上のプライオリティを競っている当事者）が公表前の論文を独占的に読み，その修正勧告や採否決定の権利を有している．審査の公平性と透明性を確保するためのセーフティネットを何重にも用意して

いるように見えながら，最終的には査読担当者の責任感と倫理性に総てを負っている制度になっている．

③複数の編集委員が査読を行うことは公平性を保つために必要不可欠だが，より当該論文に近い分野を専攻する担当者の声が反映されやすいことに併せ，加点法より減点法での評価に傾きがちになるために評価の大きく分かれる論文が通りにくい傾向にある．

しかし，現時点では査読による評価を行うことでしか学術論文の内容の質や信頼性を保証する手段はなく，上記のような問題を孕みつつも，しばらくは研究者の情報公開手段としての学術雑誌の価値は残り続けると言えるだろう．

3.2　学会発表

石割透は学会発表の問題について以下のように語っている[78]．

運営委員会の企画・立案したテーマでは，会員外の方にも発表に加わって頂いたが，近頃では益々会員外の発表を希望する声も強く，約半数を会員外の方に発表を依頼した．研究面で認識や発想の転換が必要とされ，研究対象・方法が拡散したばかりか，従来の研究領域を越境する発想・認識体系が求められているからである．そうした要望はここ一〇数年来のことであるが，現在では会員内に更にそうした要望が高まり，半ば習慣化してきた，発表者の半数は会員による，ということについても不満の声が強い．

こうした中で，自由発表による応募される会員は年間に二〇名程度という現状で，それは一八〇〇名を超す会員数を思えば，いかにも少なかった．全国の各支部でも数度の研究会が開催され，そこでの発表者を考慮すれば，それ以上の数となろうが，機関誌「日本近代文学」への投稿論文が極めて多数で，現に，刊行される度に，その頁数も増加の一途を辿っていることを思えば，口頭発表の希望者の少なさが一層目立つのである．

以上の指摘に見られるように，学会発表に取り組もうとする会員は減少傾向にある．実際，今回のアンケート調査に拠れば，学会発表は大学院生などを抜かせば，「学会から依頼があれば引き受ける程度」という認識になっているようであり，積極的な発表がなされないという状況が生み出されてしまっている．そのような学会のあり方や意義について，日比嘉高は以下のように問題提起を行っている[79]．

研究は細分化の一途をたどっています．その範囲も，時代的にも地理的にも広がっ

ています．一人の人間が「日本近代文学研究」の全領域をカバーできるなどということは，幻想としてすら成り立たない時代にとうに入り込んでいます．この傾向は続くでしょうし，不可逆と思います．であるからこそ，私はプラットフォームが必要なのだと思います．多くの研究者が，気楽に，有意義に，そして楽しくそこに参与できる，共通の場が．日本近代文学会の学会に参加して私が最近ひしひしと感じるのは，もはや近代文学会の大会は，プラットフォームとしてのその現行あり方が時代にそぐわなくなっているということです．たった一つの会場に二日間，二百人を缶詰にしても，もはや関心の「共有」など不能であり，実質的な「会」としての役割は遂行できなくなっているように思えてなりません．

すなわち，今日の文学研究はその領域があまりにも広がりすぎたために，学会活動を通じて研究情報の共有ということが困難になっている状況にある．日比はさまざまな学会運営の改革案を提出することで，現状のあり方をより良い方向に変えようとしているが，研究者の情報公開の場としての学会の機能がどのような形に変化していくのかについては，今後の学会運営のあり方を改めて確認する必要があるだろう．

また，石田仁志は坂口安吾研究会や横光利一文学会の活動に触れた上で，個人の作家を対象とした研究会の課題について以下のように述べている[80]．

個人作家研究会が「作品」ではなく，作家個人を顕彰する愛好会のごときものに堕して行く危険や，その作家に関する情報の集積が研究の〈カノン〉を生み出して新たな視点を抑圧してしまうこと，他の同時代作家の研究との横断的な連携が実際には困難なことなどなど，その問題性は充分に感じている．そのリスクをどのように回避し，作家研究を「作品」を基盤に深化させていくことができるか，常に会は試行錯誤を繰り返すしかないのだろう．

前述の日比が懸念していたのは大規模な学会運営の問題点だったが，石田が指摘する作家個人の学会の場合，当初の研究という目的から顕彰という方向に目的がずれてきてしまうという問題が生じてしまう．この点については，学会の価値をどのように高めていくかという認識を研究者個人が考えていくことと同時に，研究者同士の問題意識の共有化も求められることになるだろう．

3.3　個人サイト

表 3 にまとめたように，昨今では自らのプロフィールを公開するための個人サイトを構築する研究者が増加している．このような個人サイトでは，各研究者がこれまでに発表してきた学術論文の一覧が公開されていたり，それに併せてブログを執筆していたりするこ

とが多い．また，このような個人サイトを構築せずとも，ブログのみを活用することによって自らの研究過程や研究成果などを公開している研究者も散見される．今後はこのようなウェブツールを活用する形で，自らの研究活動の成果を広く一般に公開しようとする文学研究者がさらに増加していくものと予想される．

表 3　日本近代文学研究者による代表的な個人サイト（五十音順）

①宇佐美毅．中央大学宇佐美毅研究室．http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~usami/，（参照 2010-02-19）．
②浦西和彦．浦西和彦研究室．http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~uranishi/zemi/，（参照 2010-02-19）．
③榎本正樹．@eno Masaki Enomoto's WebSite．http://enmt.jp/，（参照 2010-02-19）．
④小埜裕二．小埜研究室へようこそ．http://sun-cc.juen.ac.jp:8080/~yuji/，（参照 2010-02-19）．
⑤亀井秀雄．亀井秀雄の発言．http://homepage2.nifty.com/k-sekirei/，（参照 2010-02-19）．
⑥紅野謙介．紅野謙介研究室．http://www.chs.nihon-u.ac.jp/jp_dpt/kk_home.htm，（参照 2010-02-19）．
⑦小谷野敦．猫を償うに猫をもってせよ．http://homepage2.nifty.com/akoyano/index.html，（参照 2010-02-19）．
⑧根岸泰子．根岸泰子のホームページ．http://www1.gifu-u.ac.jp/~kameoka/，（参照 2010-02-19）．
⑨日比嘉高．HIBI Yoshitaka's Web Site．http://park18.wakwak.com/~hibi/，（参照 2010-02-19）．
⑩渡部芳紀．渡部芳紀研究室．http://comet.tamacc.chuo-u.ac.jp/，（参照 2010-02-19）．

そのほか，文学関連のウェブサイトを一覧としてまとめる取り組みについても，個人レベルでいくつかの事例が見られる．その事例には以下のようなものがある．

①日比嘉高．“近代文学研究関連の情報収集”．HIBI Yoshitaka's Web Site．http://park18.wakwak.com/~hibi/html/mlitenet.htm，（参照 2010-02-19）．
②天野．日本文学 Internet Guide．http://densigatoru.shidareyanagi.com/，（参照 2010-02-19）．

4.　まとめ

4.1　本稿の結論

以上を踏まえると，日本近代文学研究の情報収集行動の今後の課題は以下の 4 点にまとめることができる．

①一次資料のデジタル化
そもそも日本近代文学研究に必要となる研究素材には，文学館などが所蔵している作家の直筆原稿や個人蔵書，遺品などの貴重資料が数多く含まれているため，それを閲覧することは一般に困難な状態にある．それを可能にする資料デジタル化につ

いては，徐々に事例は増加しているが，未だ発展途上の段階にあるのが現状である．

②二次資料のデジタル化

特に文学館のように貴重資料を所有している施設では二次資料のデジタル化が遅れているため，どの施設にどのような資料が所蔵されているかの情報が公にされていない．

③研究環境の都市部集中化

研究環境が都市部に集中化しているため，実際に文学館などの専門的な研究施設に足を運ぶことが困難な地方在住の文学研究者がいる．

④デジタル資料やウェブツールの利用促進

デジタル資料やデータベースはもとより，ブログやツイッターなどの新しいウェブツールについて，それらを文学研究活動に活かしていくという方法が広く確立されていない．

特に④の課題については，一般に文学研究者がコンピュータを用いることに対して立ちはだかる壁について，安永尚志が古典文学を例として以下のように指摘している[81]．

> 文学のテーマで，たとえば『源氏物語』がいま盛んです．「『源氏物語を電子化テキストで読む』とか，「物語の背景を調べる」などと言ったとき，研究材料として何があるのか，それをどうやって入手するのか，新しい考え方や簡単な道具建てや処理の方法があるかなど，情報学が支える環境があると思います．（中略）
>
> 実際に『源氏物語』の古い写本の比較をやるというときに，カードではとても無理です．コンピュータを使うとすばやく，いろいろな知識が得られることがわかってくるとどんどん使い出します．また，そのことによって新たな知見を得ることが期待できると分かる．そういう環境を十分整備することが，情報学としては大事なのではないかと思います．一方，文学の方はおんぶではなく，何をやりたいか話し合うことで，具体的なイメージを掴むことができれば成功と思われます．つまり，共同というか連携が必要と思われます．

安永はコンピュータを利用することで多量のデータを処理できるようになるため，従来の文学研究では明らかにできなかった新しい研究成果が見出せるのではないかと提言を行っている．そのためのキーワードとなるのは研究分野をまたいだ研究者同士の共同や連携であり，それによって新しい研究方法を模索していくことが今後の文学研究には求められるだろう．

4.2　今後の展望

元国文学研究資料館館長の伊井春樹は,「源氏物語千年紀」に関連した文学研究の動向を踏まえた上で，今後の文学研究者のあり方について以下のように述べている[82].

> 研究者の使命として，これからは自分だけの世界に閉じこもっていることはできないんじゃないかと思います．自分のしてきたことがどのように人々に評価されるか．発信をしなくちゃいけないし理解してもらわないといけない．いいことは次の世代に受け継いでもらわないといけない．それと同時に地球というこの宇宙に住んでいる我々は，地球環境も考えないといけない．それが文学とどう関わるかということもいずれは問題になってくるかもしれない，というふうに，どこかで絶えず自分の研究をしながら広い視野を持って，自分の勉強もしていくことがこれからの研究者には大事なことではなかろうかと思います.

すなわち，これからの文学研究者に求められることは，何をおいても自らの研究成果を世のなかに積極的に発信することである．積極的に研究成果を世の中に公開することで研究者としての評価を他者に委ね，その反省点を踏まえてさらなる研究の発展に寄与しなければならない．そうであるならば，本稿で調査したような文学研究者の情報公開行動は，研究者が所属する研究機関や学会などに預けるままにするのではなく，今後は研究者個人レベルで更なる発展を遂げられるように，各人がしっかりとその方法を身につけていかねばならないだろう．インターネットの発達が著しい昨今では，そのための手段は以前にも増して研究者の身近なものとなっているはずである．文学研究そのものの質が問われることは当然だが，今日ではそれに加え，いかにして自らの研究成果を世に問うていくかというような，外部公開の仕組みについても関心を持たなければならないだろう.

前述した安永が指摘しているように，これまでとは異なる研究手法を文学研究に提供することで，新たな知見の創出に寄与することができるのは，コンピュータに明るい情報学者の役目となるだろう．ただし，文学研究にとっては単に最新のコンピュータの技術を利用するだけでなく，従来の図書館学の知識を基礎とする過程も重要と考えられるため，筆者は安永の用いている情報学者という用語を図書館情報学者と言い換えたい．すなわち今後の課題としては，文学研究者側がいかにして図書館情報学の成果を利用するか，あるいは逆に，図書館情報学者がどのように日本近代文学研究に寄与するようなアイデアを提示し，両者の歩み寄りと共同によって新たな研究手法を確立とそれをもとにした研究成果を世に問い続けることが必要となるだろう.

5. おわりに

松林は以前に，“人文・社会科学領域での情報検索が CiNii や紀要の電子的提供によって発展しつつあると考えられる”と指摘していたが，本稿における調査結果を見る限り，日本近代文学研究においてそれはある程度正しい認識だったと評価できるだろう[83]．現状として，電子資料の提供や利用については各研究機関や各研究者レベルで模索の段階であり，今後の更なる発展が望まれる．文学研究者の情報行動については状況の変化に注意を払いながら，後日改めて調査を行う必要があるだろう．

ひとまずは今日における現状報告としてまとめてみたが，本稿がこのテーマに関する今後の議論のきっかけの一つとなることを願いたい．本稿の内容について，忌憚のないご意見やご批判を頂けると幸いである．

---

1 上田修一編．情報学基本論文集 I：情報研究への道．武者小路信和［ほか］訳．東京，勁草書房，1989，vii,241p.

2 第 57 回日本図書館情報学会研究大会シンポジウム記録：「情報検索サービスの将来像：情報提供機関のこれからの役割と課題」．日本図書館情報学会誌．2009，vol.55，no.4，p.278-281.

3 同上.

4 今回，直接のインタビューに協力していただいた研究者は，三十代から四十代にかけての日本近代文学研究者 5 名，そして三十代の日本古典文学研究者 1 名である．日本古典文学研究者を含めているのは，日本近代文学のみに話を限ってしまわずに，日本文学一般に対する視点も用意しておきたいためである．インタビューにご協力いただいた研究者の研究組織内での立場やご本人の意向もあるため，本稿内では全て匿名での記述に留める．

5 たとえば，日本の学術機関リポジトリに蓄積された学術情報を横断的に検索できる「学術機関リポジトリポータル JAIRO」を用い，「夏目漱石」を検索語としてそれに関連する文献を探してみれば，研究名古屋大学大学院国際言語文化研究科編『言語文化論集』，新潟大学大学院現代社会文化研究科編『現代社会文化研究』，筑波大学教育学系編『筑波大学教育学系論集』などの学術雑誌のタイトルが検索されることが確認できる．
国立情報学研究所．JAIRO：Japanese Institutional Repositories Online.
http://jairo.nii.ac.jp/，（参照 2010-02-19）.

6 前掲 1．参照は，“特定主題についての情報の情報源”，p.159-168.

7 學燈社．“「國文學」「学燈」休刊のお知らせ”．（株）學燈社ホームページ.
http://www.gakutousya.co.jp/contents/list/index.html，（参照 2010-02-19）.

8 前掲 2.

9 科学技術振興機構．“J-STAGE の位置付け”．J-STAGE　科学技術情報発信・流通総合システム．http://info.jstage.jst.go.jp/info/info/itizuke.html，（参照 2010-02-19）.

10 東京大学附属図書館・情報基盤センター. 東京大学学術機関リポジトリ：UT Repository.
http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/，（参照 2010-02-19）.

11 筑波大学附属図書館．つくばリポジトリ（Tulips-R）.
http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/dspace/，（参照 2010-02-19）.

12 同志社大学図書館．同志社大学学術リポジトリ.
http://elib.doshisha.ac.jp/japanese/index.html，（参照 2010-02-19）.

13 兵庫教育大学教育研究支援部．HEART：Hyokyo Repository.
http://repository.hyogo-u.ac.jp/，（参照 2010-02-19）.

[14] 広島大学図書館．広島大学学術情報リポジトリ．http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/,（参照 2010-02-19）.
[15] 広島県大学図書館協議会．HARP：広島県大学共同リポジトリ．
http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/,（参照 2010-02-19）.
[16] 九州大学附属図書館．九州大学学術情報リポジトリ（QIR）.
https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/,（参照 2010-02-19）.
[17] 別府大学附属図書館．別府大学機関リポジトリ（BUILD）．http://repo.beppu-u.ac.jp/,（参照 2010-02-19）.
[18] 今回のインタビュー調査の中で，機関リポジトリによって研究成果の公開を行うことの必要性を感じていない一部の研究者が，所属大学の附属図書館に対して公開の是非について問い合わせるという事態が発生したという報告が筆者に寄せられている．
[19] Modern Language Association (MLA)．MLA International Bibliography.
http://www.mla.org/bibliography,（参照 2010-02-19）.
[20] Ithaka．JSTOR．http://www.jstor.org/,（参照 2010-02-19）.
[21] The Johns Hopkins University Press．Project MUSE．http://muse.jhu.edu/,（参照 2010-02-19）.
[22] 国立国会図書館．近代デジタルライブラリー．http://kindai.ndl.go.jp/,（参照 2010-02-19）.
[23] 東京大学附属図書館・情報基盤センター．鷗外文庫書入本画像データベース．
http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/,（参照 2010-02-19）.
[24] 八木書店．Web 版日本近代文学館．http://yagi.jkn21.com/,（参照 2010-02-19）.
[25] Google．Google ブックス．http://books.google.co.jp/,（参照 2010-02-19）.
[26] Questia Media America．Questia - The Online Library of Books and Journals.
http://www.questia.com/,（参照 2010-02-19）.
[27] 河野至恩．東京大学総合図書館「 鷗外文庫プロジェクト」．日本近代文学.2007，no.77，p.229-236.
[28] 岡野裕行．個人書誌作成における文学館の役割：三浦綾子記念文学館を事例として．図書館情報メディア研究．2005，vol.3，no.1，p.77-87.
[29] 復刻の意義については，筆者自身による以下の論考がある．
岡野裕行．文学館の「出版者的機能」に関する考察：日本近代文学館の復刻を中心に．情報メディア研究．2007，vol.5，no.1，p.21-38.
[30] 国立国会図書館．NDL-OPAC：国立国会図書館蔵書検索・申込システム．
http://opac.ndl.go.jp/,（参照 2010-02-19）.
[31] 国立情報学研究所．NACSIS Webcat：総合目録データベース WWW 検索サービス．
http://webcat.nii.ac.jp/,（参照 2010-02-19）.
[32] The Library of Congress, Library of Congress Online Catalogs, http://catalog.loc.gov/
[33] 東京都古書籍商業協同組合．日本の古本屋．http://www.kosho.or.jp/,（参照 2010-02-19）.
[34] 紫式部．スーパー源氏：本と文化の街．http://sgenji.jp/,（参照 2010-02-19）.
[35] 国立国会図書館．雑誌記事索引．http://opac.ndl.go.jp/,（参照 2010-02-19）.
[36] 国文学研究資料館．国文学論文目録データベース．http://base1.nijl.ac.jp/~ronbun/,（参照 2010-02-19）.
[37] 国立情報学研究所．CiNii - NII 論文情報ナビゲータ．http://ci.nii.ac.jp/,（参照 2010-02-19）.
[38] 国文学研究資料館．日本古典籍総合目録．http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html,（参照 2010-02-19）.
[39] 国立国会図書館．雑誌記事索引採録誌一覧．
http://www.ndl.go.jp/jp/data/sakuin/sakuin_index.html,（参照 2010-02-19）.

[40] 国立国会図書館．プランゲ文庫検索．http://opac.ndl.go.jp/，（参照 2010-02-19）．
[41] 早稲田大学 20 世紀メディア研究．占領期新聞・雑誌情報データベース．
http://m20thdb.jp/，（参照 2010-02-19）．
[42] 時野谷ゆり．プランゲ文庫をめぐる文学研究の課題と可能性．昭和文学研究．2007，no.55，p.113-116.
[43] 岡野裕行編．“文学館一覧”．文学館研究会．
http://www.literarymuseum.net/lm-list.html，（参照 2010-02-19）．
[44] 中村稔．文学館の使命：図書館的機能と博物館的機能．全国文学館協議会会報．2001，no.17，p.8-9.
[45] 庄司達也．出版メディアと文学・作家・読者：改造社に関する研究会に参加して．昭和文学研究．2007，no.55，p.123-126.
[46] 武藤康史．文学館に遊ぶ．．東京人．2001，vol.16，no.2，p.24-45.
[47] 岡野裕行．日本近代文学研究における文学館の役割：「全国文学館協議会」加盟文学館の発行物を中心に．筑波大学，2006，博士論文.
[48] 前掲 29.
[49] 宗像和重．「若き久米正雄・芥川龍之介・菊池寛」展から：第四次『新思潮』の草稿・原稿・校正刷をめぐって．日本近代文学．2009，no.80，p.228-232.
[50] 前掲 45.
[51] 岡野裕行. 文学館の検索システムの現状と課題. 情報メディア研究. 2009, vol.7, no.1, p.41-61.
[52] 日本近代文学館. 日本近代文学館所蔵雑誌検索. http://webopac.bungakukan.or.jp/,（参照 2010-02-19）.
[53] 日本近代文学館. 日本近代文学館資料写真検索. http://webopac.bungakukan.or.jp/pic/,（参照 2010-02-19）.
[54] 神奈川近代文学館．神奈川近代文学館資料検索システム．
http://www.kanabun.or.jp/kensaku.html，（参照 2010-02-19）．
[55] 日本現代詩歌文学館．日本現代詩歌文学館図書・雑誌検索システム．
http://opac.shiikabun.jp/，（参照 2010-02-19）．
[56] 大阪府立国際児童文学館. 資料の検索. http://opac.iiclo.or.jp/iliswing/opac/index.html,（参照 2010-02-19）.
[57] 北海道立文学館．雑誌の検索．http://www.h-bungaku.or.jp/cgi/booksearch/search.cgi,（参照 2010-02-19）.
[58] 北海道立文学館．図書の検索．
http://www.h-bungaku.or.jp/cgi/booksearch/search.cgi?action=books,（参照 2010-02-19）.
[59] 北海道立文学館．高橋留治文庫．
http://www.h-bungaku.or.jp/collection/tomeji_index.html，（参照 2010-02-19）．
[60] 青森県近代文学館．青森県近代文学館 OPAC．
http://www.plib.net.pref.aomori.jp/opac_bun/index.jsp，（参照 2010-02-19）．
[61] 仙台文学館．所蔵資料目録．http://www.lit.city.sendai.jp/inn/Syz/Syzmain.htm，（参照 2010-02-19）.
[62] 群馬県立土屋文明記念文学館．蔵書検索．http://www.gskb.net/TBK/searchTop.aspx,（参照 2010-02-19）.
[63] 水と緑と詩のまち前橋文学館．前橋文学館　収蔵資料検索システム．
http://www.maebashi-bungakukan-sakutarou-mokuroku.jp/，（参照 2010-02-19）．
[64] さいたま文学館．蔵書検索．
http://www.saitama-bungakukan.org/opac/app/RS000Retrieve.php,（参照 2010-02-19）.
[65] 山梨県立文学館．資料を探す．

http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/iliswing/opac/kensaku.jsp,（参照 2010-02-19）.
[66] 徳島県立文学書道館．文学書道館作品資料検索．
http://www.bungakushodo.jp/wsearch/wsearch/menu.html,（参照 2010-02-19）.
[67] 武者小路実篤記念館．武者小路実篤記念館収蔵品データベース．
http://www.saneatsu.org/,（参照 2010-02-19）.
[68] 若州一滴文庫．若州一滴文庫　蔵書検索．http://www.itteki.jp/library/index.php,（参照 2010-02-19）.
[69] 前掲 51.
[70] 松村良．高橋新太郎文庫のこと．昭和文学研究．2008，no.56，p.196-198.
[71] ノラ・コミュニケーションズ．“コレクション紹介”．高橋新太郎文庫．
http://www.noracomi.co.jp/takahashi/books.html,（参照 2010-02-19）.
[72] チャールズ・シロー・イノウエ．日本近代文学の現在と将来．日本近代文学．2006，no.75，p.239-246.
[73] ツイッターの機能については以下の文献が詳しく述べている．
津田大介．Twitter 社会論：新たなリアルタイム・ウェブの潮流．東京，洋泉社，2009，191p,（新書 y；227）.
[74] helpline. @helpline/kokubun. http://twitter.com/helpline/kokubun,（参照 2010-02-19）.
[75] 笠間書院．笠間書院　kasamashoin ONLINE．http://kasamashoin.jp/,（参照 2010-02-19）.
[76] 和泉書院．いずみ通信．
http://www.izumipb.co.jp/izumi/modules/myalbum/viewcat.php?cid=1,（参照 2010-02-19）.
[77] 宗像和重．研究者が研究者の論文を評価するということ．日本近代文学．2007，no.76，p.264-269.
[78] 石割透．二年間の学会運営を終えて：口頭発表の意義・運営のあり方など．日本近代文学．2007，no.76，p.270-276.
[79] 日比嘉高．拝啓，先生…とか．．日本近代文学．2009，no.81，p.335-341.
[80] 石田仁志．教育と研究の狭間で．昭和文学研究．2007，no.54，p.92-95.
[81] 安永尚志ほか．“第一〇章　討論：歴史知識学の可能性”．歴史知識学ことはじめ．東京，勉誠出版，2009，p.149-193．参照は，p.188-189.
[82] 伊井春樹．伊井春樹氏インタビュー：「源氏物語千年紀」と研究のこれから．リポート笠間．2009，no.50，p.46-59.
[83] 前掲 2.